

千家茶道置合之書 全

特261

215

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始



特261  
215



道  
置  
合  
之  
書

天然宗左

口

授

天  
眞  
寺  
藏  
版



一、

茶點時左右の手可心付事  
右の手遣ふ時は左の手膝に置氣を付る也。左を遣ふ時は右の手膝に置氣を付る事第一の事也。能成ては如何様にして置ても矢張其手心拵ある事。

一、

水翻に茶碗入點手前  
是は佗て面白事也。老人の致べき事也。仙叟好て度々被成候。水こぼし茶碗取合あり。鞆の蓋に長次郎黒茶碗を仕込原望御點被成候。ケ様の取合殊外能候也。面通金の水こぼしよろしからず。  
此手前の時柄杓蓋置は堂庫或は棚成釘へ掛る也。何も無し時は風爐の窓敷居へ杓立掛柄の先の留へ蓋置を置合。尤も柄杓仰向候也。また向板風爐先窓斗りの所は平水指にて其上へ置くなり。

一、

一、茶點する時は茶碗常の如く仕込小きこぼしへ入兩手にて拵出しこぼし座へ置茶入を直し茶碗を出し茶入と置合す也。扱物蓋置を取寄置付夫より茶點事同じ唐物點或茶筌飾に此手前組合事又作略あり傳授の書にあり。

一、或時如心齋八畳敷にて此手前に點候時棚も無柄物置所も無之風爐也。左の方勝手のふすま勝手のかたへ柄物立かけ其前へ蓋置を置て被點候事あり。尤もケ様筆形になり候事には候はねども先是に記す。

一、茶の時宜之事

濃茶末座へ廻り吞候時茶を申候はば一度は時宜すべし。再三に及ばば亭主へ返すべし。上客も同じ餘り深く時宜候は亦不宜。

一、湯返しの事

釣棚釘堂庫右の三色は湯返しは致し不申候。其外臺子長板棚類いづれも湯返し極てする也。併し棚類も柄物勝手へ拵入候はば湯返しせざるがよし。

一、棚へ上る茶碗の事

茶點仕舞茶碗棚へ上るから茶碗拭て仕舞て茶碗棚へ上る也。尤茶中等能紋り置て仕廻也。また勝手へ取入茶碗ならは拭に及不申候。

一、濃茶の時茶碗受取事

濃茶の時茶碗渡にして受取にても膝を廻申事無之事なり。すべて居ながら受取渡申可也。乍去貴人より受取時は膝を廻候が宜敷候。亦亭主も茶を出時膝を廻茶

碗を出す事なし。是も又貴人の時は廻りたるがよし。

會席前に薄茶點る事

此時は矢張り其の日遣ふ道具なり水指片口杯遣ふた  
るが面白茶碗かはりを遣ふたるがよし客には茶碗其  
外道具を見る事無し。後濃茶の時見ざる故なり。水指又は  
替茶碗になくとも其の日入道具遣ふてくるしからず

予宗匠の夜咄の茶に逢ふたる時は初薄茶の時白粉

解後濃茶の茶入樂燒也。後の薄茶は桐の蒔繪ある昔棗

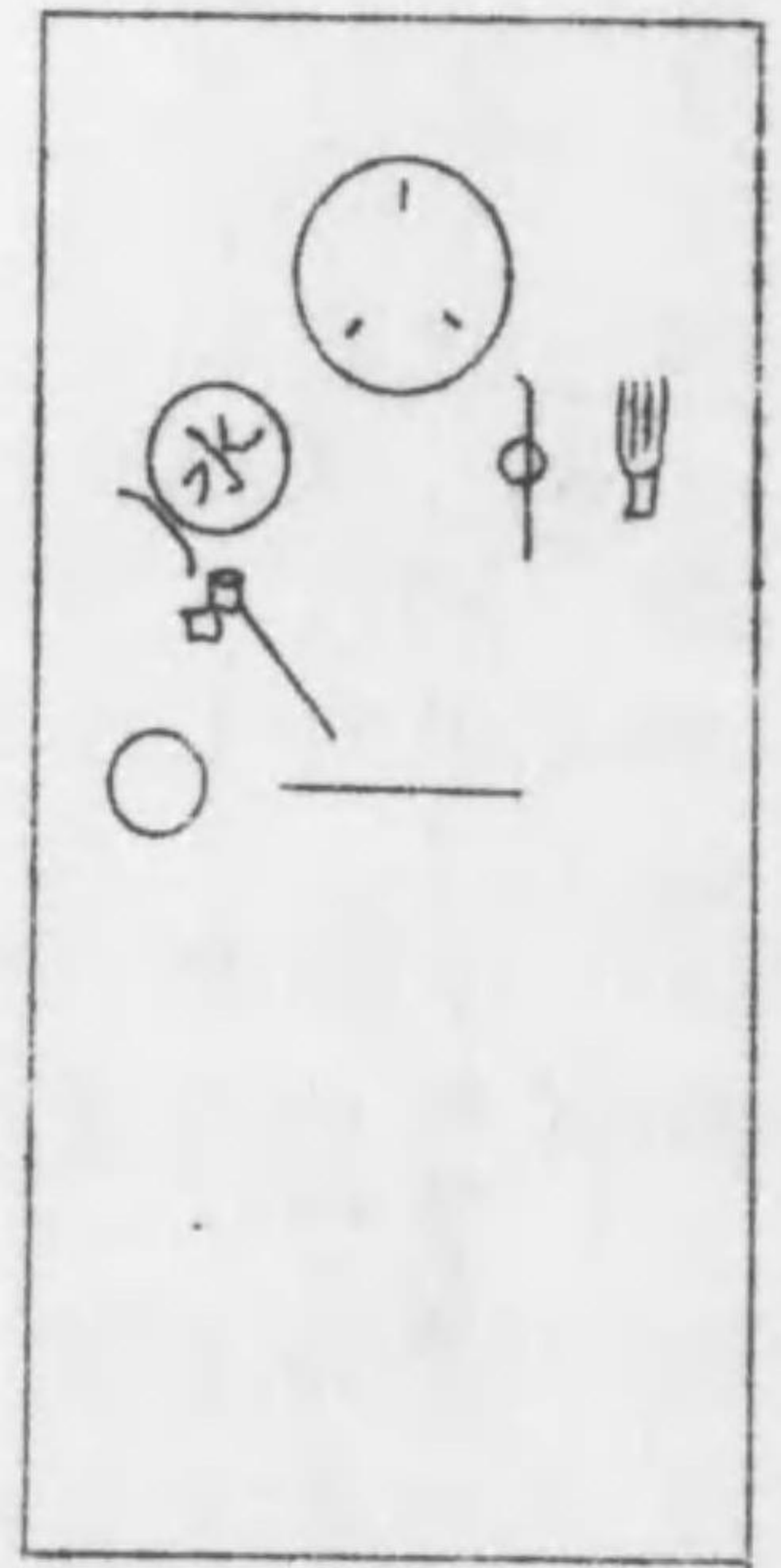
也。尤後の茶水指も吞(ウツク)を遣ひ被申候。

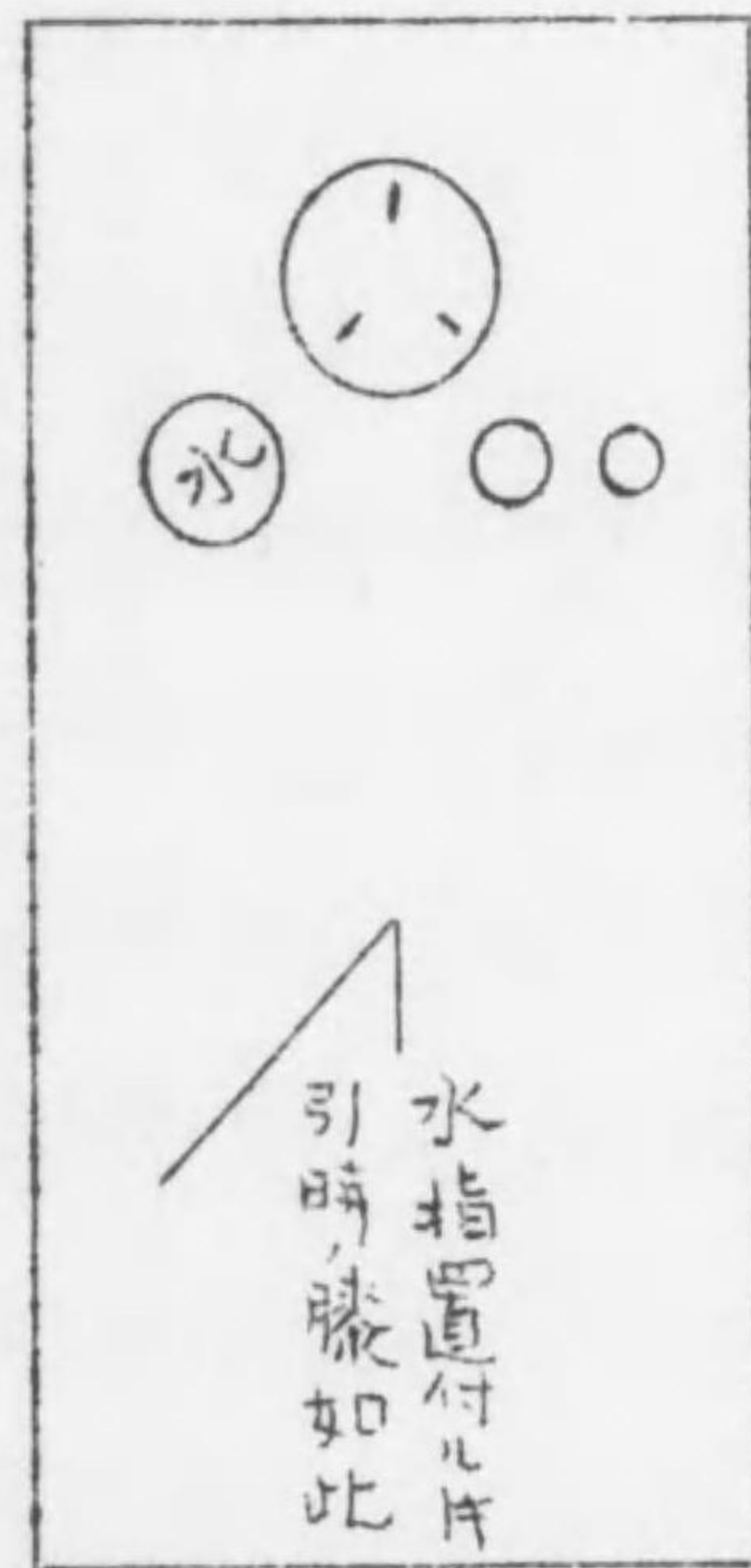
宗躰へ茶も宗匠被成御出尤朝茶也。此時別に薄茶好み  
被申候。此所は片口を持出て薄茶點たるよし。後に宗匠  
へ承り候へば宗躰能出来る也と被仰候。又宗匠お好斗

なされ候は朝茶の心也と被仰候

風爐中置の事

是は長板一つ置の如く置へ置也。此の時蓋置は水指と  
水こぼしの間へ置柄杓我前へ少し角ちがひに引也。手  
前は長板一つ置の如く原望より初まる  
客へ茶入出す時は先茶人を前へ取寄せ茶碗茶入の後

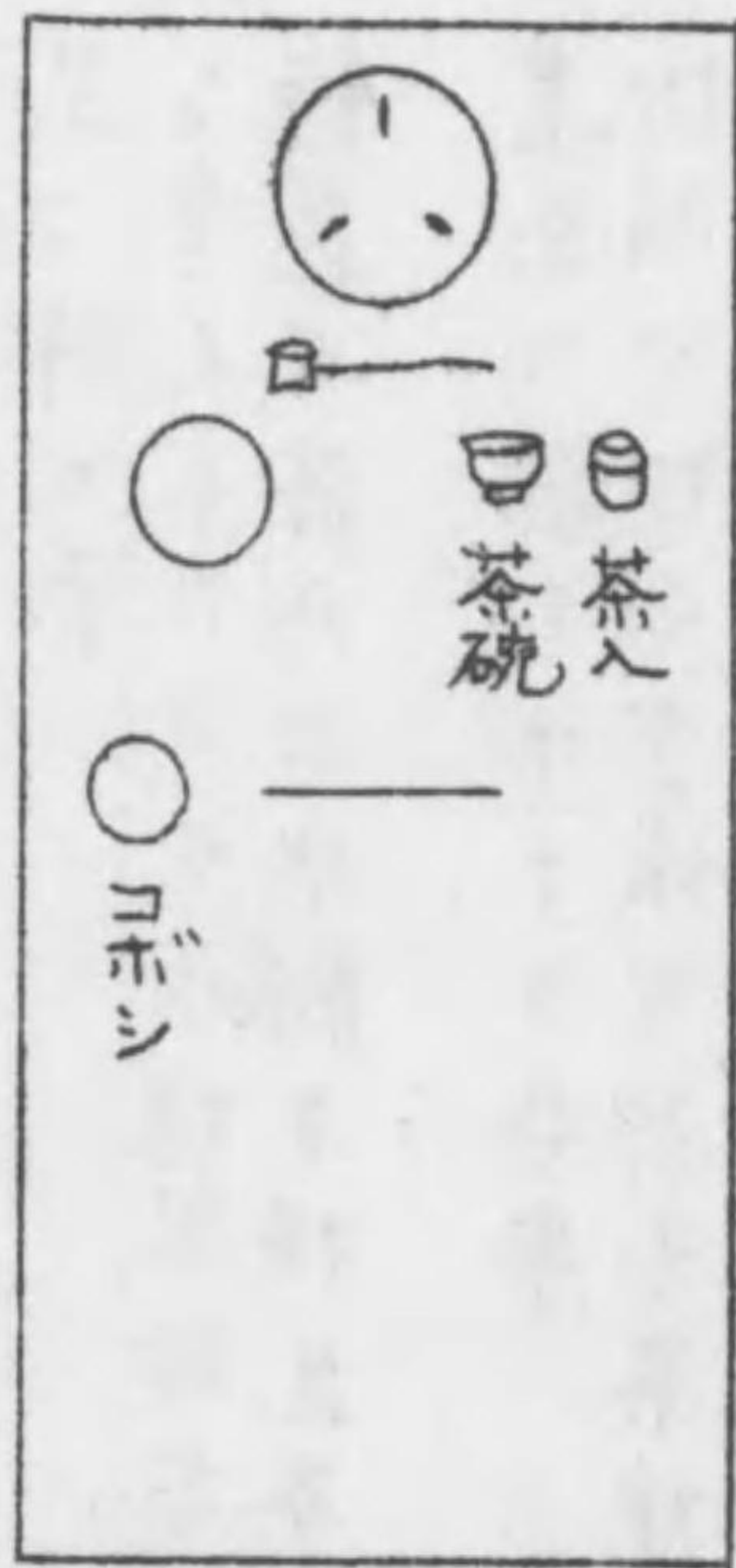




茶入茶碗置合如  
是仕廻又如此  
茶入斗初飾ハ右  
ニツ、中也

一  
の方へ少し寄せ置夫より茶入拵客の方へまはり拭出  
したるがよし其の他手前は長板一つ置の如し炭の時  
も向板の上へ風爐を置候事あり尤一つ亦は常の通り置  
向板の上へ併常の如く置たりとも水指其外の道具は運  
事もあり併常の如く置たりとも水指其外の道具は運  
び申し候た柄杓など置事なし只の置の上へ置くを向  
板の上置たると心得べし。手前は長板に柄杓立のな

一  
き物也尤柄杓は板の上へ横に引たり。



濃茶點出敷居より出居事  
貴人の時は濃茶點出し爐ならば釜の蓋をメ柄杓蓋置  
を仕舞其身は敷居より外出で居る事あり其時は茶碗  
を宥見る内に又内へ入り釜の蓋をとりもとの如く居

る也。

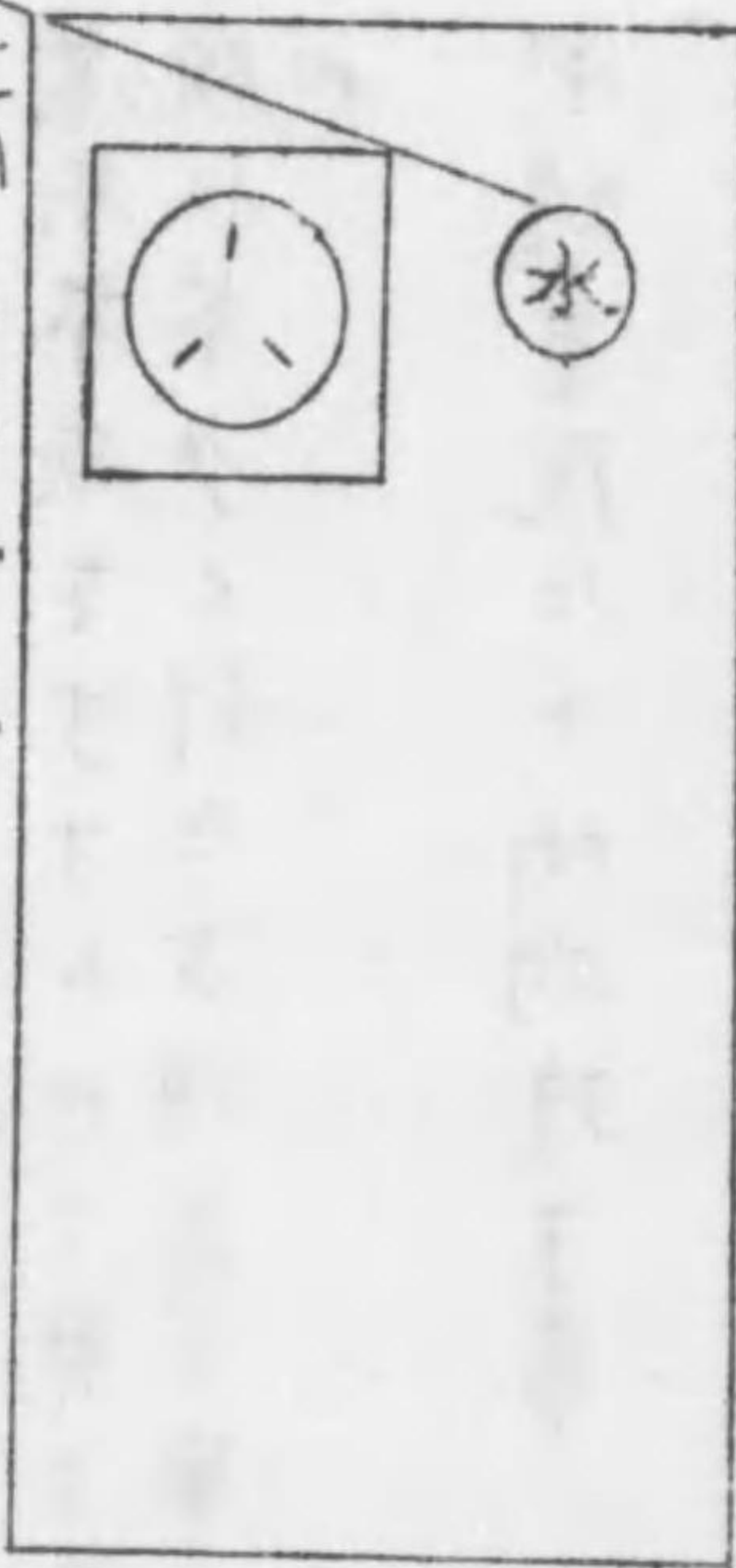
一、 棚類は極て水指の前にて仕舞申候又棚なし風爐の時  
は水指の前にて仕廻申候ても能候むがしは水指の前  
にて仕廻申候去るに依てくるしがかりず。

一、 是茶碗を重んじたる也。水指茶碗茶入と三つ客の入不  
申前に飾置也。客入て水飛を拵出茶點る。

一、 昔何の御時が知らず候へども茶殊外御大切に被成候  
あり其時分の事なり。今は先ヶ様の事無え候。

一、 客へ茶碗を出す所の事  
置の縁より茶碗壹ヶ置程明て先へ出す也。尤も風爐  
向板等は右の膝の通り少し先へなる様に。

風爐の時水指置様



一、 風爐先に此向より常に常の如く真中へ置たるを少しよせ也。  
に間中明きたる時は水指常の如く置付風爐の

方向への角へ少し寄る様に置付ける也。

一、濃茶茶碗をすすがせて見る事  
是日茶碗に茶多く付たる時ある事也。餘りせず事と申されし也。

風爐書院にて柄杓残す事



如是蓋置に柄杓を引薄茶入左の如く置合上に常置て置たり。

一、水盛の先へ袋置事

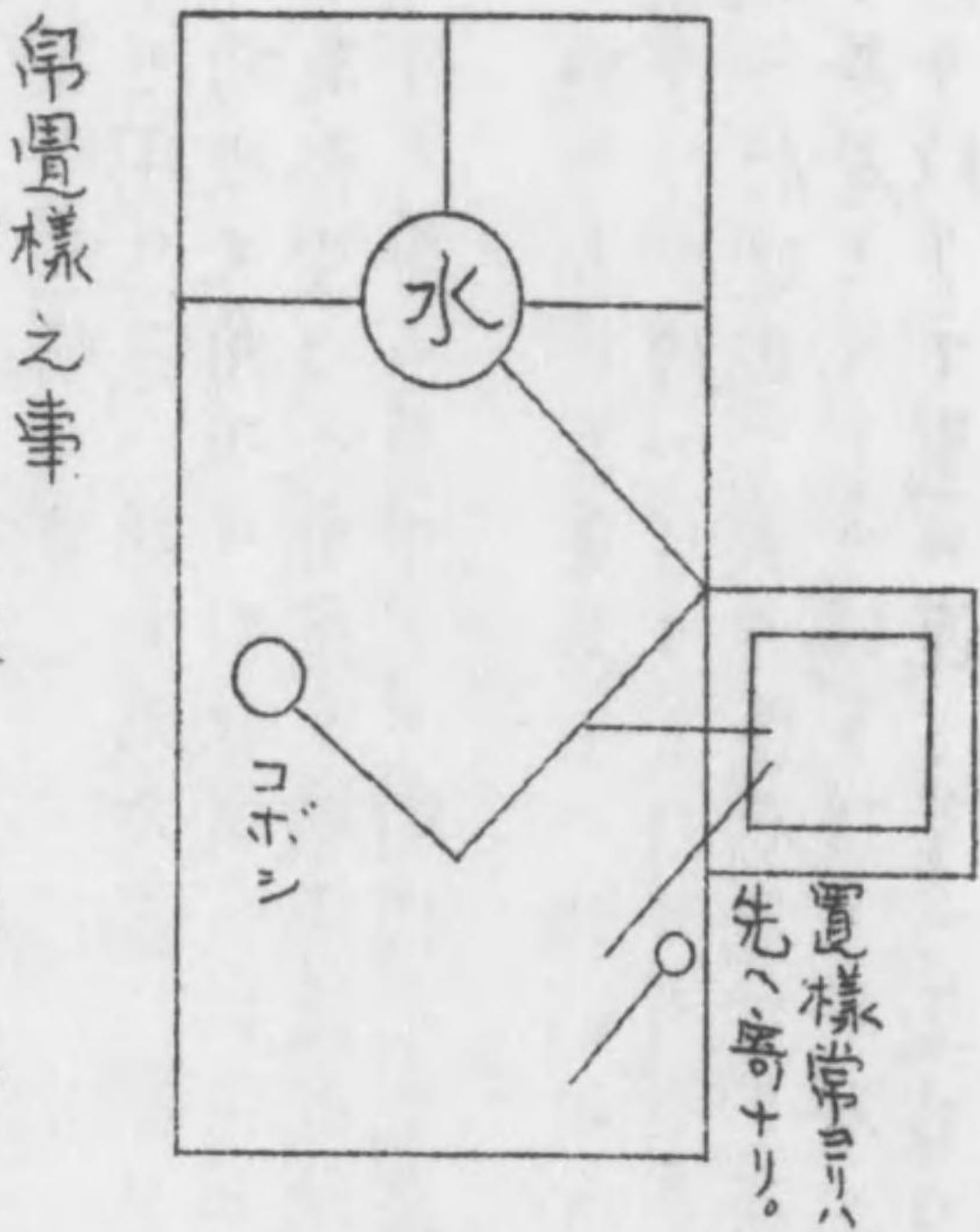
是は不苦候得ども定りけ水指の脇か釘へ懸るなり何分子細もありて水指の脇へも棚へも釘へも懸る事なり。ゆめ時り此處へも置たり。先棚か釘か水指の脇かへ置れぬと云ふ事なし。水こぼしの後へ置也。若自然水翻の先へ置候はば茶仕廻道具出す時袋を水翻の跡へ直し置扱茶碗を水翻の先へ假り座へ直茶入茶杓袋を出也。

四疊半置合之圖

一、我前に見る處も昔は隅を見申候へども今は爐縁の四つに割て上の壹つを目當にする。

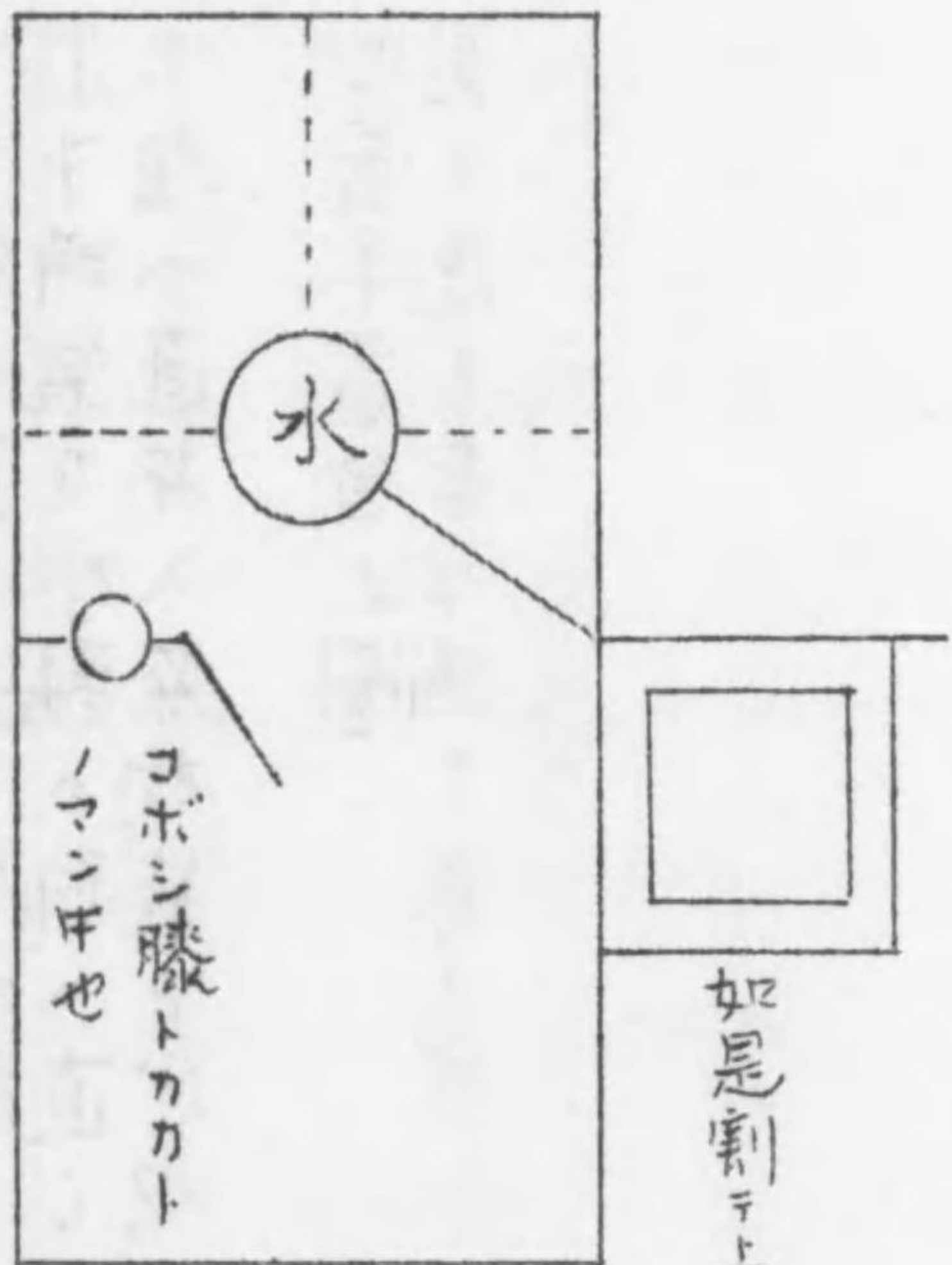


一、  
 角を取引上げた時横の角向へ折たる時は三つにな  
 り又角前へ折きたるときは其儘二つ折置也。世上に茶  
 入の時は一つに折茶柄の時は二つに折と云へり。さに



一 一 一

一 一 一  
 爐縁の角を前に見るなり。  
 柄杓の柄釜へ懸時眞直たるは古風也。角ちがいには置は  
 後に出来たる也。此方可然。  
 水指半置四方眞中也。



水指昔は半置の  
 眞中へ置申候今  
 は半の眞中少し  
 水指程引出し置  
 たり。

如是割テ上方シ見ル也

一、あらず真の置様傳授の書に有之候。  
亦二つに折て茶巾のやうに置事有之候。

茶巾置様之事

一、置様常の用は三つ折に成次第に皺杯に不構たたみ  
四つに折也。又角取に引張常の如く三つに折り四つに  
置事も有。恭受は大方是を被用候。此角取折は重き事也。  
真の茶巾と草の茶巾との間位也。尤真の置様は傳書に  
あり。

一、茶巾小板の上は置事道安の物好也。今以用之。

一、絞り茶巾は水使ひにてしほりたるを少しぬじ戻し其  
儘茶碗へ仕廻出て夫々置合茶巾を釜の蓋或は水指  
へ取り茶釜とふじの湯を汲入茶釜を茶碗へ入置扱茶  
巾を取り絞りにて置直し釜の蓋或は水指の上へ置茶

一、茶釜とふじする也。亦厚き大茶碗杯を使ふ時此しほり茶  
巾にして出て湯を茶碗へ入其湯をこぼし又湯を汲入  
て扱中蓋をめる茶釜を入夫より茶巾をしほり置もよ  
し扱茶釜とふじする也。如心齋大系月の茶碗を被使候  
時如此に被成候。

一、茶釜とうしをして茶釜座へ使し夫より茶巾をしほり  
直すに右の手にて茶巾を拵ながら茶碗左りの手に取  
右茶巾拵ながら茶碗取揚て湯を捨茶碗を拭たり。又大  
成茶碗は其茶巾を右にて茶碗のふちへ懸て取左の手  
にて底へ添兩手にて湯を捨直に茶はんふくたり。  
茶巾も急度したる事申候はば布入表を表に用也。

茶釜之事

一、茶釜の表と云事有。茶點時常は何のしやべつなく使ひ

申候。是もきつ度正して使ふ時は茶筌の折としめのか  
 たがまへなり。  
 一、茶點時置へ置事は向より置たり茶筌の軸を向より置  
 へ付る也。  
 一、茶筌とふしをするは常躰初は茶筌を茶碗へしつと大  
 指にておさへ茶筌を三度取上扱さるさりとふり引上  
 て茶筌の座へ使す也。是も引上る事三度に極たるにも  
 ちし幾度にてもよし又後には茶筌すまぐ時常躰は水  
 を茶碗に入茶筌取入さるさりとふり又三度取上見又  
 三度さるさる振て引上座へ使す。  
 一、仕舞にケ様致し不申一度一度に茶筌を振て取上申事  
 有之候間には致事也。原變は間々被成候由如心和尚も  
 我等茶に逢し時一度ケ様に被成候。

一、茶碗の内にて丸さくるみのよふたるを茶筌にて舞心  
 拵能し。

一、拵處は中ハ節より少し明拵たるがよし。柄の先を拵た  
 る付あし候。深拵が古風にて言と被仰候。  
 一、茶點時水を指す時は定て柄杓うへよりとり拵直し水  
 を汲なり。  
 一、又水を指るとき右に柄杓を常に水を指如くとり左の手  
 を添不申水指の前ふちへもたせ懸て拵替水を汲事あ  
 り。間には不苦候也。宗匠御申被成候余り不致事と心得  
 べし。今他流に致すと云。  
 一、柄杓を蓋置へ懸て置へ置時紅指ゆびの下より受たる

一 一 一  
 思し。大指と紅指ゆびと先の下へさがりたるよし。跡三  
 本の指へ柄を受夫より落とし初拵たる儘にて落  
 す。がよし。  
 柄杓釜へ懸事は随分柄杓の角を少懸きはときがよし  
 左手前は風爐の事也。柄杓の柄少角ちがいには置事常射也  
 風爐のときは置柄杓切柄杓引柄杓と三色有。切柄杓は  
 大方初にする也。又仕舞の時する事よし。即ち初に柄杓  
 たる事はもちし。又初に置柄杓にしたりとて不苦候。拵  
 置柄杓引柄杓裁度も不苦候。初終置柄杓にて不苦候得  
 共余りかた。成り候故切柄杓引柄杓交へて使ふなり。  
 爐は釜の前輪へうむけて合ウを懸る也。是常也。又湯  
 吹上杯する時は合のふちを釜の輪へかくる事もあり  
 是も湯の吹上にも不限人先其心得なり。

一  
 宗旦後には柄杓を左へ拵釜の蓋置時杯の柄杓の時柄  
 をし。つかりと惣指にて握り候由也。何様△老の被成候  
 事は能能有候由宗匠被仰候。

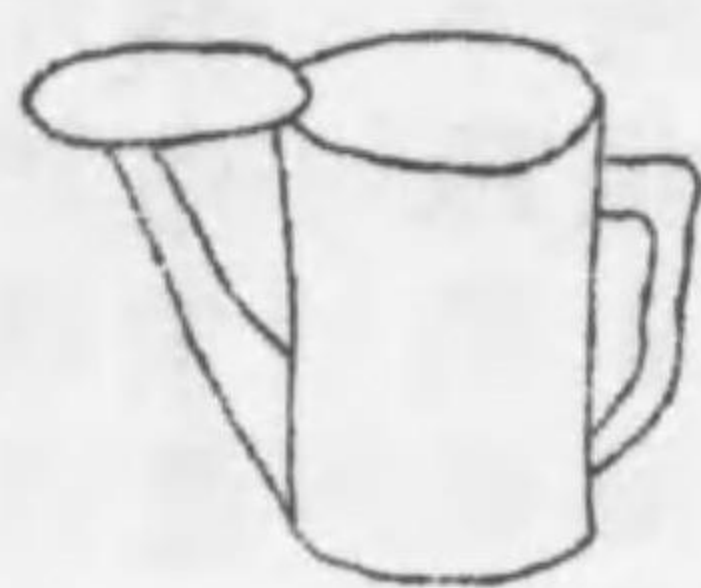
自在の取扱の事

一  
 茶點時別の取扱なし。茶點懸ても釜を少し下る事あり  
 是釜のへ不申時にする也。即ち是も濃茶の時杯は宗  
 匠は居前崩れ悪敷と御好不被成候。

鎖之事

一  
 くさり。是も茶點時くさり貳つ三つ下る事あり。是も如  
 心齋宗匠御好不被成候。茶點懸り爐前へ寄杯すれは躰  
 崩れあしきと被仰候。別にあしらは無之候。

一、 片口水指に用る事  
 夜嘸夜込に前茶の時杯用てよし。又後の茶の時よし併  
 極りたる事にはなし。其時々景氣なり。  
 茶點る時蓋取るは四つの指にて下より少し上げ大指  
 にて持かため其儘片口の口とふちとへ着せ懸る也。蓋  
 をするにも右の如く持て其儘取る也。尤片口の口の方  
 釜へ向候。



此圖の如く取也。

一、 片口の蓋は木目横に用也。仙望は立に用られ候故に今  
 以裏は△つに用也。

一、 或時覺々齋片口を置付候時口を筋ちがい置付る事  
 あり。其後又如心齋宗匠右の通に被置付候得ども覺々  
 齋被申候は若時はせめ事也と被申候夫より如心齋決  
 して此置付不被用所我等を召呼れ候時濃茶後に薄茶  
 の時片口にて筋ちがひに被置付候まづ余り面白過た  
 る置付に候へば替古杯には不致事と被仰候。殊の外佗  
 たる案と被申候。

釜に水指事

一、 釜へ水を指事は炭を仕舞薰物を炷勝手へ入片口の蓋  
 の上に茶巾を置載せ持出る。其座に置左にて茶巾を取  
 る勝手に寄て右切片口の蓋を兩手にて取釜の前へ仰向  
 にとる事あり。

一、  
 置釜の蓋をとり片口の蓋の中ふちへかけて置茶中を  
 片口の下へ當て右にて片口の手を拵左に寄て釜へ水  
 能程にさし片口本の處へ置釜の蓋をメる尤釜の蓋は  
 茶中にてつまみしめる茶中にて釜の蓋の口の邊を拭  
 茶中其儘片口の蓋の上へ置尤蓋は仰向けたる儘也扱  
 蓋を其儘仰向片口の上へのせ本の如く拵入る也夫よ  
 り出て釜をかけ候也片口の置よふは釜へ向申候是に  
 て爐風爐の了管あるべし又片口の蓋の上へ蓋置を乘  
 せ出るあり此時は片口の蓋とる事無大成釜のふたは  
 是非如此す小き釜の蓋は蓋置入不申候免角釜の蓋に  
 よるべし  
 片口にて口へ蓋置さす事よろしからず。



如是蓋置茶中  
 のせる也。

一、  
 夜咄杯 大口を水指に便ふ事  
 水指に便ふ時は扱様替り事なし片口の如蒸

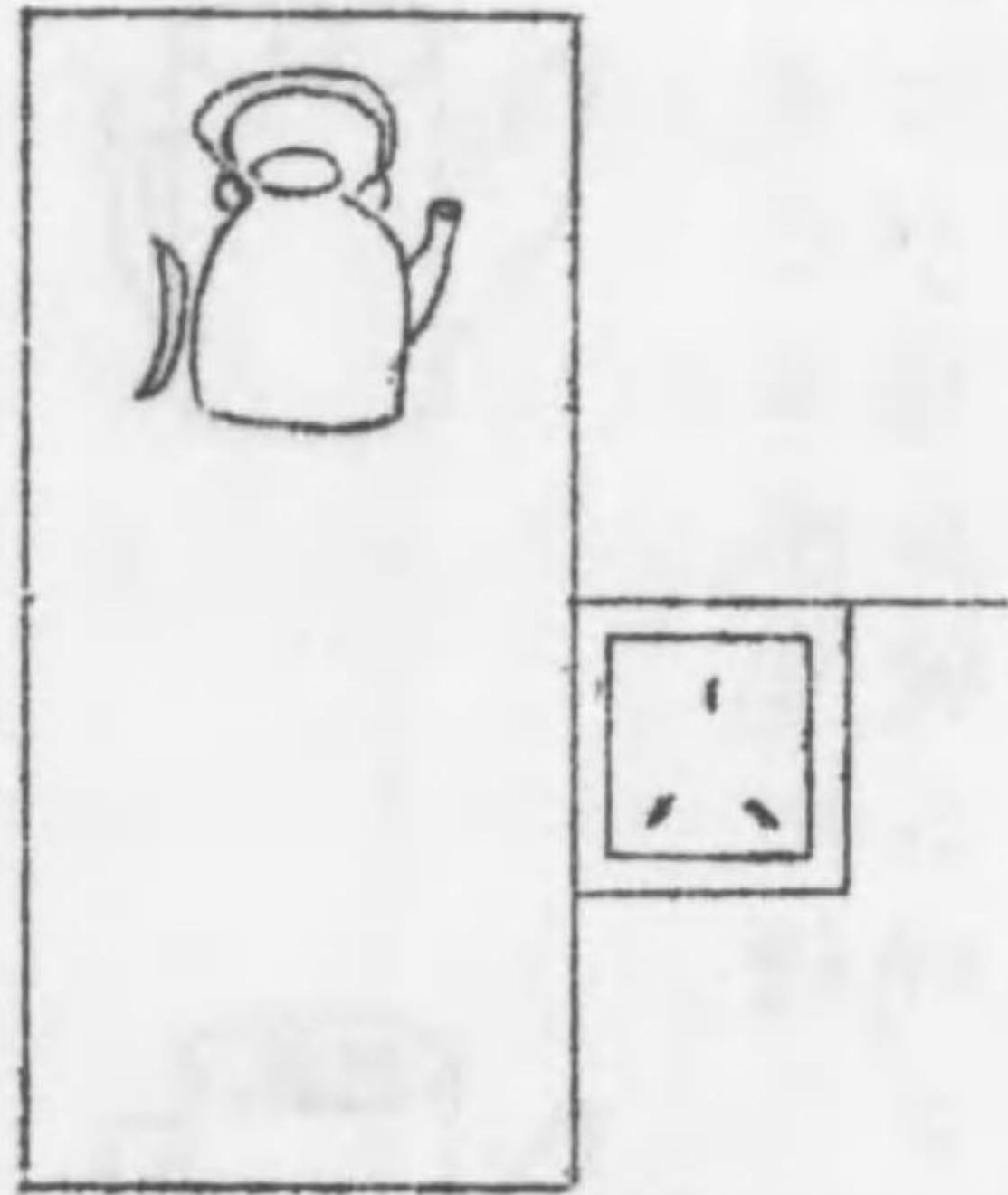


は取申候是は勝手道具也釜を仕懸る時は是へ水をこし  
 入夫より釜へ水を移物也黒塗也座敷にては釜へ水を

指には不用。

薬鐘之事

釜へ水を指す時は決て蓋置を添る也。此蓋へ釜の蓋を載る事なし。ふた置は薬鐘の口へ指て持出候尤歸も此如く其取扱片口の如し。



一、

水指に用る也。片口と同じ。是を置付て弦を向の方へ相せ申候蓋の取様は常の水指の如し。爐の時は口の置方蓋を拵せ懸る也。是も角ちがひにもおくなり。利休所持の薬鐘有り。今是を寫し用ゆ。

一、

曲物水指取扱之事。此水指は置付にはとじめを前にする也。蓋を取時は四つ指を下より懸少し上げ上より大指にて拵かため我前へ取り左へ拵右にてふちを拵直し水指の脇へもたせ懸也。蓋をする事も是に同じ。木目横に便ふ。仙變は堅に使ふ。裏は今に堅に使ふ。



一、 釣瓶水指え取扱

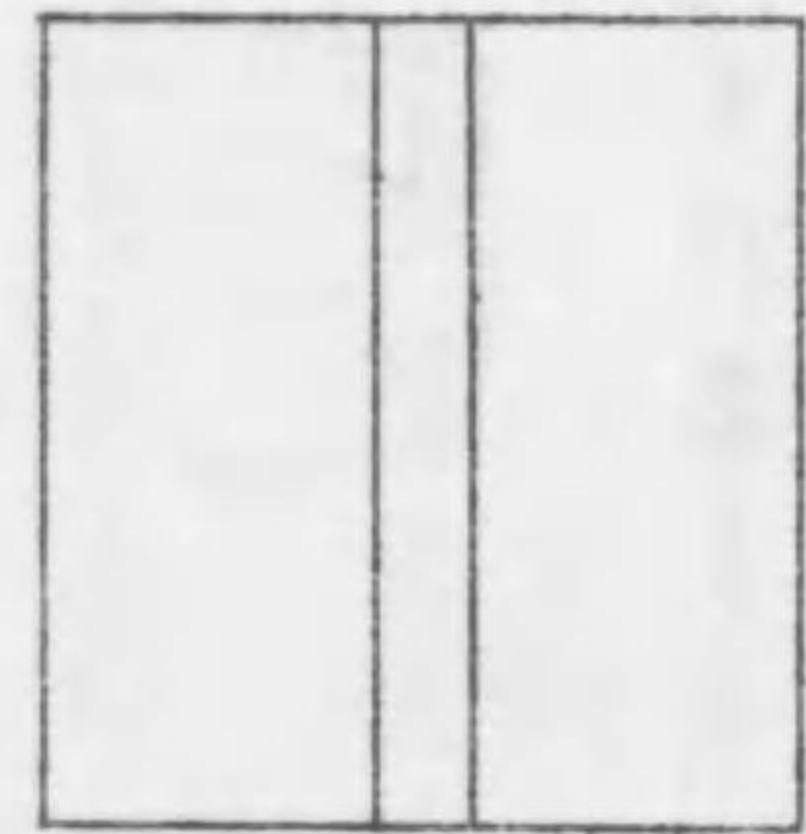
一、 拵出る時右の手にて釣瓶の手を拵左の手を脇へ底へ拵添出也。是昔よりの法也。取入る時も如此す。覺々齋

一、

常の水指の如く拵せ候よし。 爐風爐共に取蓋の方釜へ向る也。蓋取様は蓋の向へ右の手をかけ少し前へ引出し蓋の前を右にて拵引出し其儘蓋の上へ七八分程懸て又向へ突込二三歩程前へ残し申候蓋するときも又前の如く右にて引出し其儘蓋する方へ七八歩程先をかけて突込也。亦蓋を取時前の如くして其儘前へ取前にて後先へ廻し片蓋上へ突込申事もあり。 此時はふたする時も前にて廻し戻す也。是は仙叟の被成候事此方にても間にはする事也。 風爐の時客の方の蓋を取事あり其時は初置付る時蓋

一、

とる方を客付にして置也。覺々齋被成候よし宗匠被申候置付様は臺月の時は置の目六つ也。



一、 眞の手桶取扱之事

一、 手は横に置付る也。爐の時足壹つを前にする風爐の時足二つを前にする也。蓋取様は右にて蓋の前をとリ我前にて左を添へ右へ廻し右の手にて向の蓋の上へに重る也。かさねさまに左の手を蓋の左の方へ添へ



置也。蓋するときは右にて右の方を拵、左をそへとり上げ、右にて前へ寄前にて左をそへ廻し、戻右にて蓋をする也。又常の水指の蓋の如く取てもよし。其時は丸き方下也。拵出する時は釣瓶の如右にて手を拵、左を添へ拵也。尤横也。



一、蓋へ露を打達もあり。尤蓋斗也。手拵へ懸りたるは悪し。水の手に懸りたる事なり。眞の手柄、臺子長板にも用申候。四方棚にも用ゆ。此時は蓋は向へ重難し。脇へ取也。其内長板へ取合よし。

置水指取扱之事

一、置水指は濃茶濟て取入事なし。其儘置付也。棚の如く用ゆ。蓋のうへえ茶碗茶入を残す事もあり。又柄杓蓋置を残す事もあり。江岑棚の天井の如く、茶濟て水をさし添事なし。ふたは曲物にて丸盆の縁の高き様なるものなり。尤蓋の取様は曲水指の蓋のごとし。

平水指蓋取扱の事

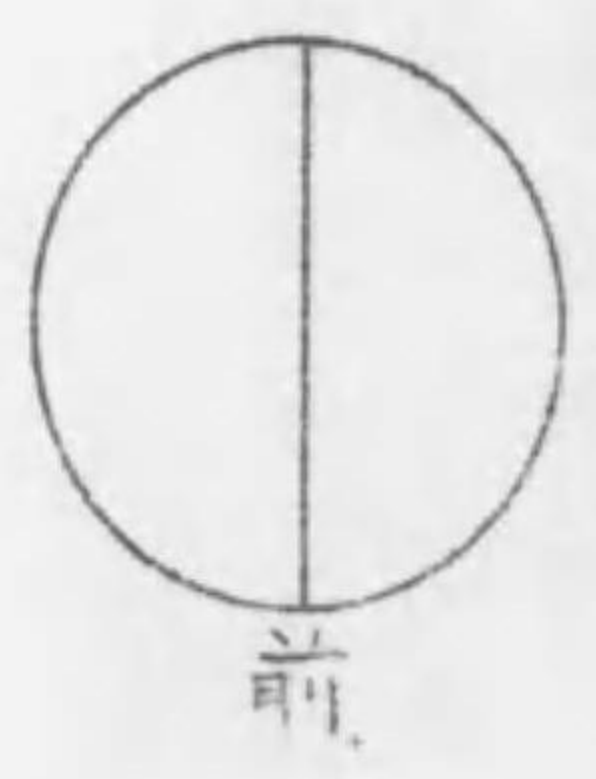
一、平水指の大成は蓋向へ取也。此時は水指の蓋のはしきを右にて取其儘向へもたせ、又はしきを右にて取前にて左にて蓋の横を拵心にて蓋の前を拵、右の手にて水指の向へ拵せ懸る事もあり。此方致吉。尤蓋の向の方上也。亦不審庵の座敷にては中柱へもたせ掛事もあり。柱の外棚の下通り也。風爐柄杓蓋置のこす。

一、水指の蓋へ水を打奉  
 塗蓋の事也、先は夏する事也、併夏斗に限たるに非ず見  
 合景氣多るべし、遠の手桶をも水打也、ふた斗也、斗へか  
 かりぬふに打

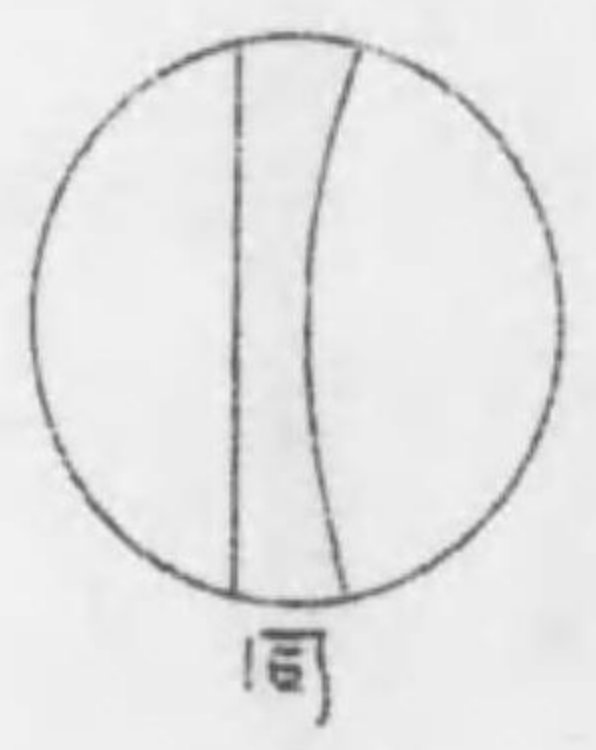
一、水指の蓋にしに使ふたる事  
 是は恭受宗安茶の湯に被致候時、手水指の大成蓋故、中  
 立の時置付る時、後より蓋は拵行候半に相忘れ蓋にし  
 に置付て鉦鍋を打申候、容座入して蓋無殊外面白よし  
 申候得共、宗安被申候は是は不致奉、今日ヶ様ヶ様の事  
 にて蓋相忘申候得ども、其時は酷暑の頃故、あまり悪敷  
 も見へ不申候、寒所扱忘申候はば、津々被見申候と被申  
 候定を聞備、今にも酷暑には蓋にしに使ふと立り、是決  
 して不致奉なり

一、水指の水汲様の事  
 口廣水指は柄杓を中へ入、前の方にて水を汲上申候、口  
 の少きは中にて水を汲あげ申候

一、水指割蓋扱の事  
 割蓋は柄杓蓋置、或事あり、茶入の蓋取如、半分取たり、皆  
 取時は重懸たる儘を賣つに取リ脇へ立懸也、丸方下  
 にする、皆取は夏の事也、常躰は半分よし、丸釜の方を取  
 るなり、  
 割蓋の水指蝶つがい無は釣瓶の如く立に使用



水指割蓋  
 割之圖

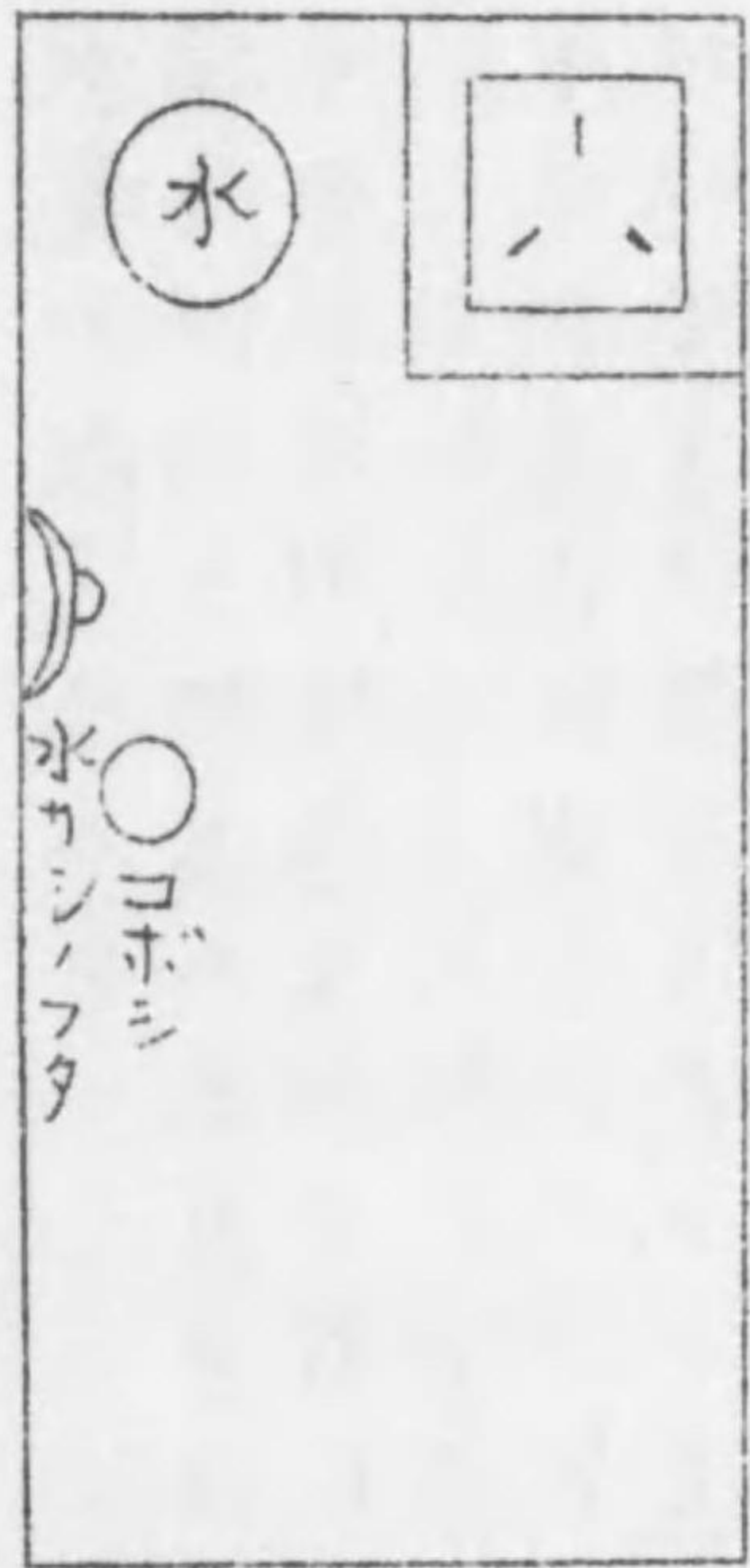


ふた取たる所  
 取る也

一、水指の蓋の取處の事  
 水指のふたを取屏風襖杯へ立懸る事悪し如心齋宗匠は  
 水指へ立掛事多く被好候也  
 不審庵座敷

釣棚

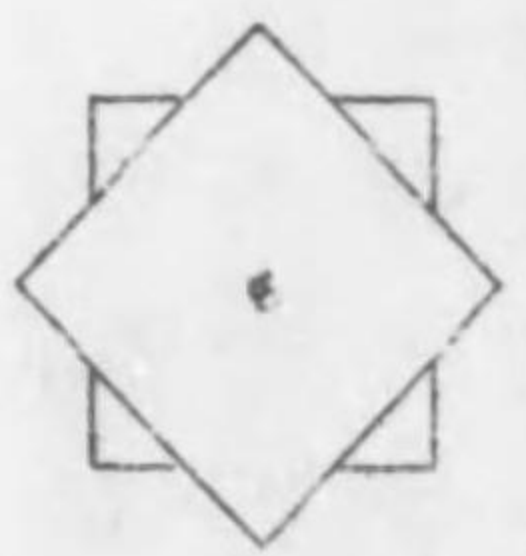
風爐の時は中柱に  
 立掛る事も有り  
 釣棚の下通り



一、水指の蓋は水指へ立掛るか壁に立懸るか  
 又壁に水指の通りと水櫃の先との間へ立掛事も有  
 きふた杯吉

一、昔は服紗にて取扱致候得ども如心齋はあぶなきとて  
 シヤウ張の環にて扱被申候

一、此釜の蓋の切よふは隅ちがい切申候是習也  
 四方口之釜扱之事



如是蓋を隅ちがいに切なり

雲龍釜

一、此釜にあしらいはな候。他にて雲龍のあしらいとて水を一がい入、又こぼしへ汲取申候事有。此方にては無之事也。只常の通りなり。

達磨堂

一、帛にて取扱する爐へす自在にこも鎖にこも用

百訛釜

一、服紗にて扱ふ

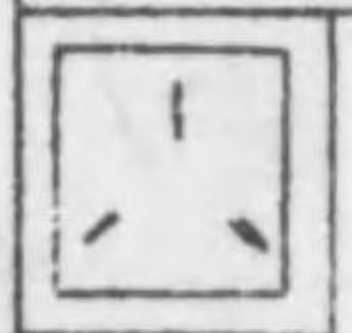
仕付の鑊の事

一、四方釜雲龍釜仕付の鑊也。仕付の鉤は五徳居所釜を懸鑊の合目兩方とも下へして置由。又兩方とも合り鑊付

の内へして置事もあり是はこしやくにて不宜候下へ下る方よし。

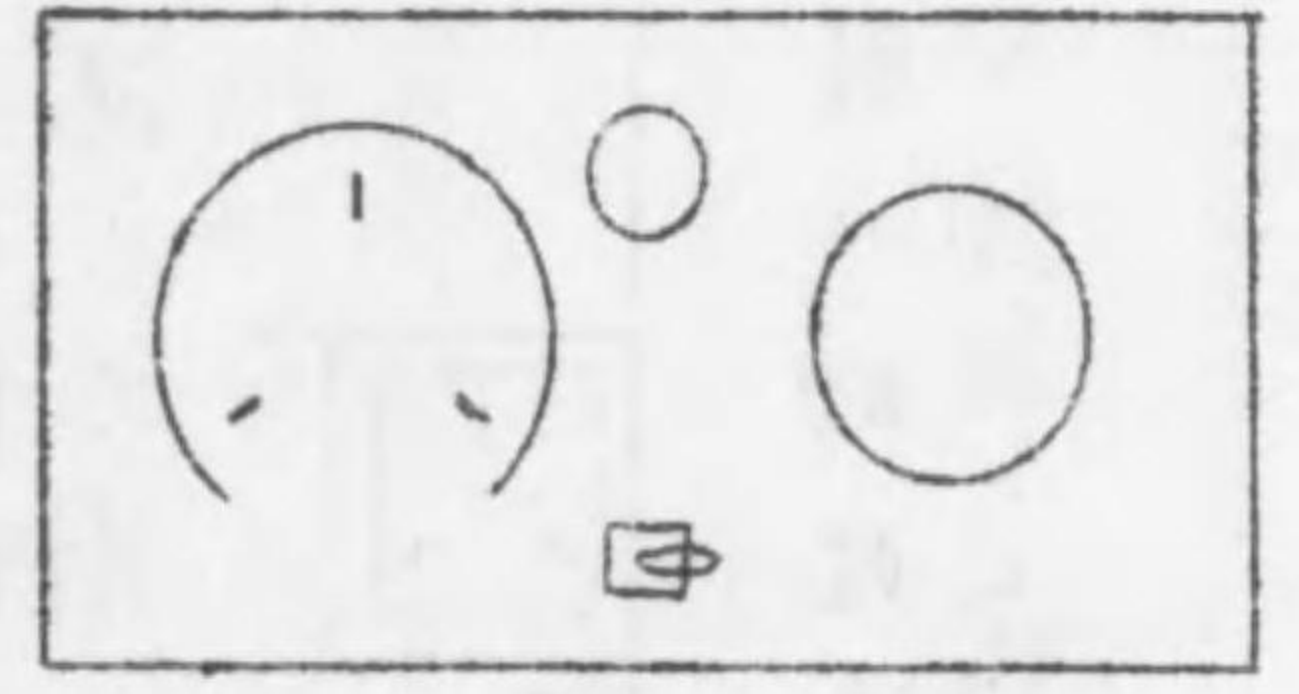
一閑人蓋置の事

一、人形の方角へして置付る也。釜の蓋取時爐の時、爐の方へかへし風爐の時は風爐の方へかへし申候。又柄杓掛時、も返して掛る也。右圖の如し。



置付時ハ如此返時ハ上へ頭向ト心得ルベシ

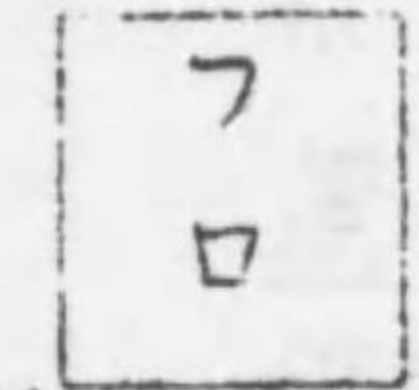
返シタル時如此



蔓子長板にては釜のふた取時如此  
客付のかたへ頭を返すなり頭上へ  
向く心得べし



風爐の時置  
付は如此  
角ちがみ



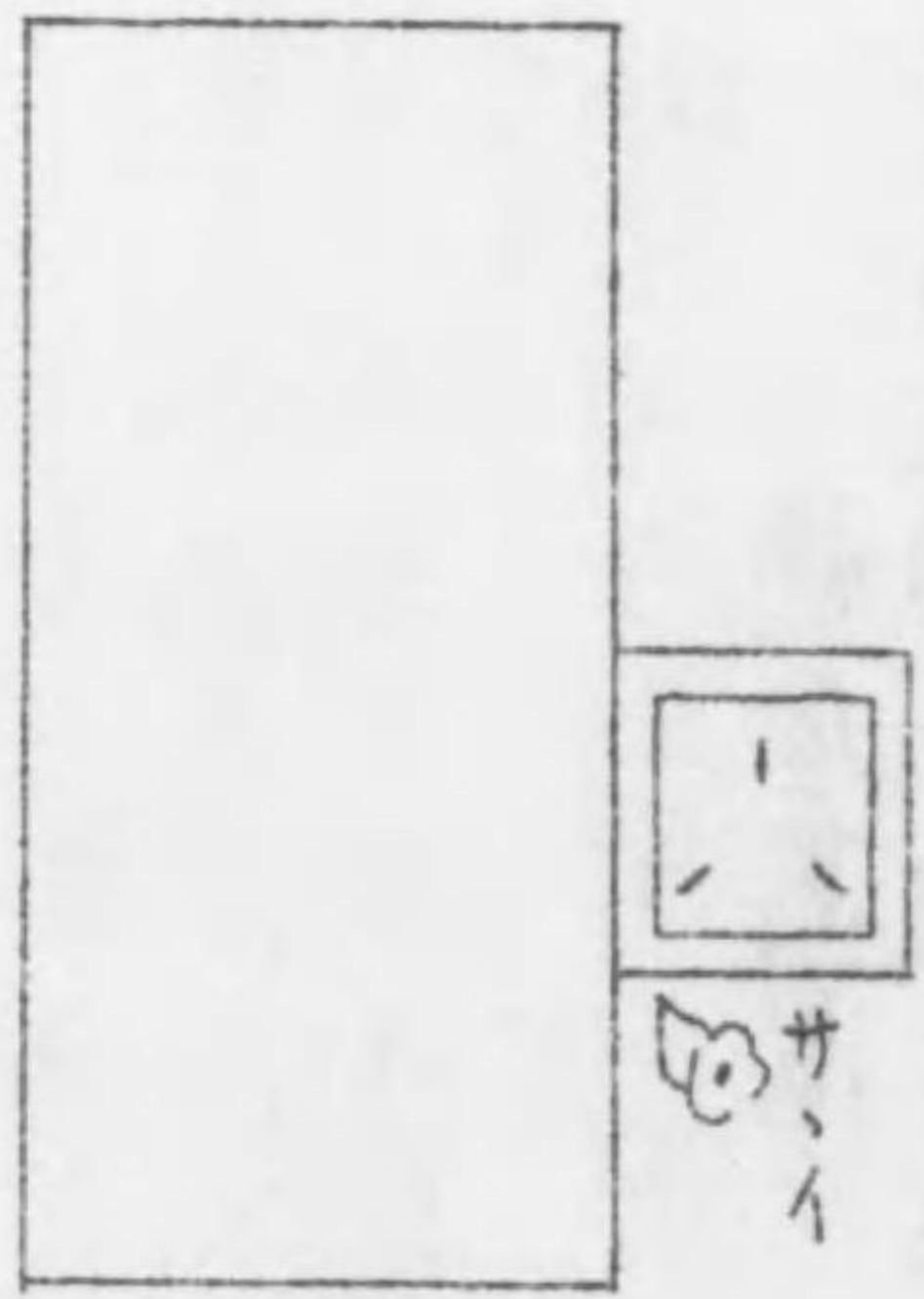
返したる時は  
如此上の方へ  
頭の向なり

一

是は返したる羽織を着たる人一人あり是壹人の方  
前也又柄引時は向二人の天窓へ合を懸る也尤壹人  
柄の通りなり其外子細なし爐風呂ともに同じ

一

是は取扱五徳と同事也利休より用ゆ宗匠方今にあり



刺螺如此尻を釜の方へ少し隅  
をかけ置付也  
釜の蓋取るときは返したる時は  
尻を我右のかたへたる也尤柄  
柄引ときは返して引申候返し  
とふ五徳の如し

一 三つ葉ふた置  
 せまき方を上にして置付也。釜の蓋取時返し申候九一  
 つの方向也。柄を懸時は柄の通りたり。五徳とおちじ扱  
 たり。

穂屋蓋置

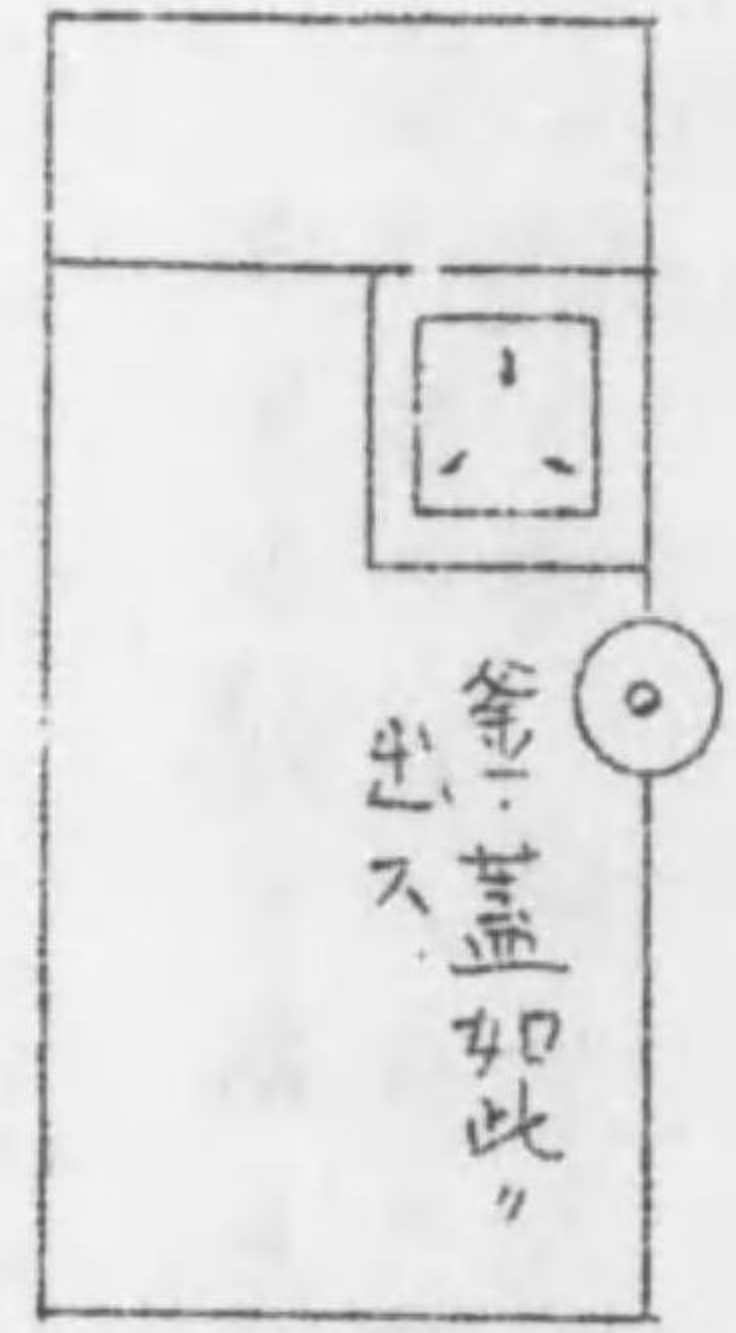
一 臺子長板の時は蓋を仕たがら置付釜の蓋を取時穂屋  
 を右にて取左へ載右にて蓋を取かして重もとの所  
 へ置付釜の蓋を取也。仕廻にも柄杓を柄杓立へさし又  
 前のごとく穂屋を取蓋を前の柄杓を柄杓をか仕る也。爐の時爐の  
 方へ置付るにも同じ。此時柄杓をか仕るなり。風爐も此心得あ  
 るべし。

四角成夜學

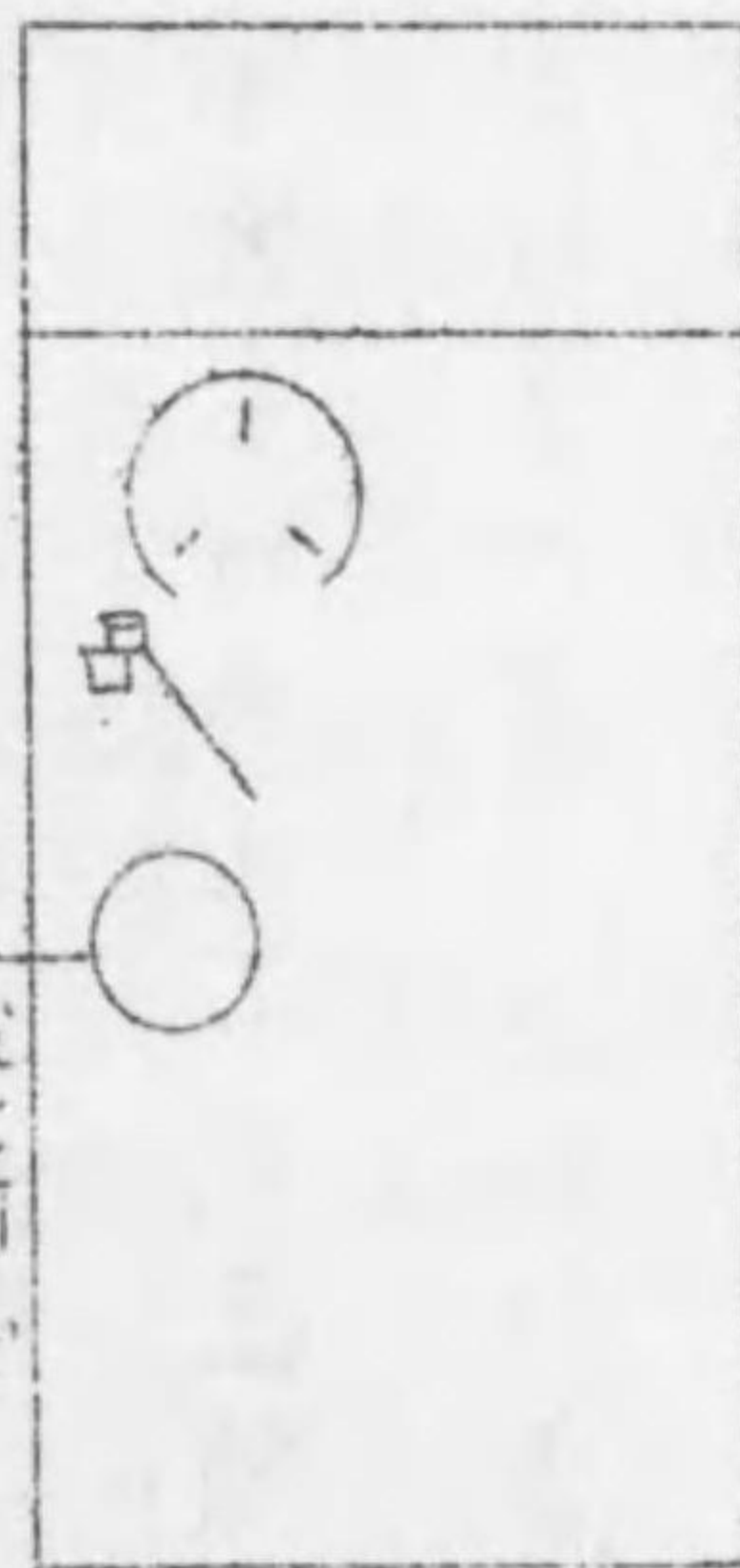
一 爐四置半、臺目にても爐縁の通眞直に置付柄杓引也。風  
 爐のときは角違置柄杓の通り眞直なる方向申候。又釣棚は  
 棚類には釜の蓋置金の蓋置か焼物を用申候。又釣棚は  
 竹の蓋置をも揚申候。  
 一 蟹のふた置取扱子細なし餘り不冝ものよし宗匠被  
 申候と也。

釜大蓋のあしらひ

一 向點の時大成る蓋は置のへりへ出申候是も初は常の  
 如く置付柄杓懸申釜のふ  
 た取時外へ出す。



一、  
 持出候時はとじめ右の裏へ向て持出扱柄杓置付て又  
 綴めを壁の方へ廻すなり是古風也如心宗通は如此す  
 3 ちり。



一、  
 原受は右の如く持出て後にとじめ後の方へ廻し被申  
 候  
 二、  
 こぼし置所は膝より半行程先へ出し置也。

一、  
 水飜へ柄杓懸る事  
 飜持出るとき柄杓の合を飜のふちへかけて出申候茶  
 入茶杓袋を客へ出時或は中仕舞の時柄杓懸へ懸るに  
 は合を外へ落して懸也。

一、  
 茶入水指裏表の事  
 茶入水指表とするは薬懸りの景氣能所或は少にても  
 品替たる所を表とする也。

一、  
 筒茶碗扱之事  
 筒茶碗扱ふは先底を拭其後にてふちを拭也茶中は  
 其儘ふちへ懸ながら其上を拵て下へ置茶中を取常  
 如こして釜の蓋の上へ置也又前の如くして茶中を中  
 入下に置茶中を取釜の蓋へ置もあり。

一、筒は冬用ひ平は夏茶碗たり。

筒茶碗平茶碗茶釜仕廻

一、平茶碗は茶釜の穂を上にしてこへるがよし。筒茶碗は其外口せまきは穂を下にして仕込たり。湯を捨時右の手にて茶碗の縁を拵左の手にて底へ添ふる事あり是は原叟の被致候事也。茶中を縁へかけ其上を右にて拵前の如左を添湯を捨其茶中にて直に拭ふ事度々は悪し。濃茶の時杯一度は吉と如心宗近被申候。

茶入棗拵様の事

一、茶入棗の時拵は拵出の時惣取扱ふ時拵は上より手をかけ申候を茶碗へ茶を入時又茶入を拭置付時杯は横より拵申候。又中次雪吹の類は惣拵横より拵申候。

茶入見よふの事

一、茶入見よふは先右にて取り左の手の平へのせ蓋を取下へ置拵茶入に片手を添底を見て胴をまはし見る也。又口杯を見て蓋をして次に廻す也。唐物は左へ廻す事也。

茶入割蓋の事

一、茶を汲時は蓋を半分明て茶を汲也。又茶を拂申候は其儘重懸ちがら取て下に置也。此時蓋をするにも其儘重ぬちがら蓋をして本の如くしめ也。又茶をけらひ申不る時は前の如く皆取も吉。兎角濃茶杯の時茶を多く汲時は心得あるべし。又常の蓋の如く取ても吉。薄茶の時入方半分明る也。妙喜庵松の木平茶入も常の平茶入の扱に同じ。蓋左の



如く右松の茶入蓋拭ふ一文字の薄茶入の割蓋に蝶  
つがいの無物也。蓋取時は取儘にて重なり茶をけらひ  
候時にも重ぬながら取る也。如是也。

平茶入取扱之事

茶を汲時は常の如く左にて取、右の手にて茶杓持なが  
ら茶入を拵左の手の平へのせ、大指を茶入の肩へかけ  
蓋を取、茶入を汲也。本の所へ直にも右にて拵直し置付  
る也。拭様常の如し。

水滴の扱の事

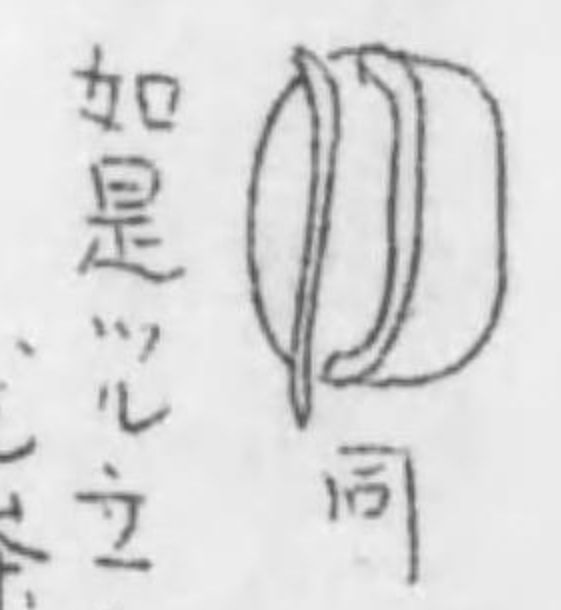
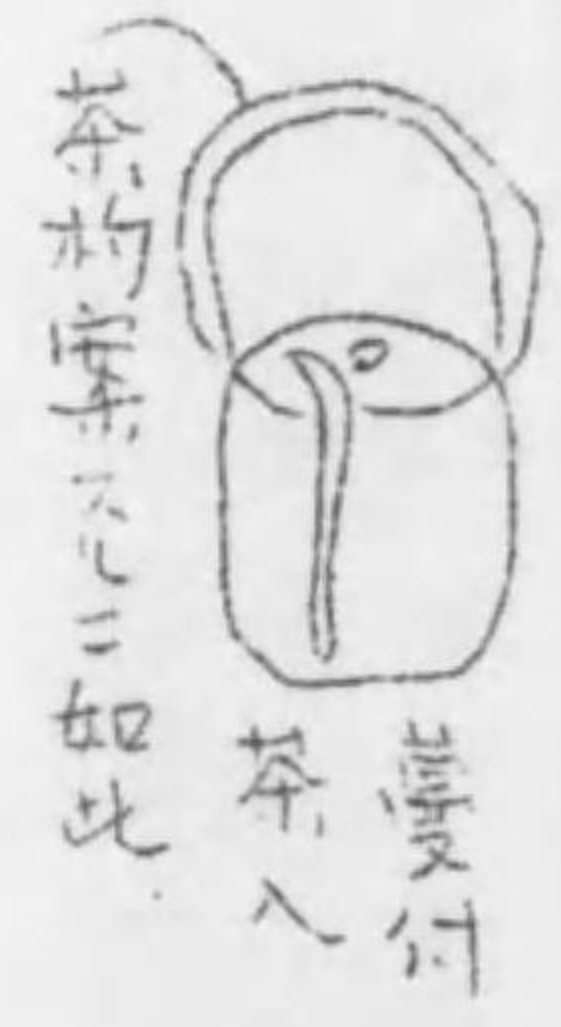
水滴置付は口をば釜の方へ向被申候。拭様は如常蓋を  
拭て胴を廻し不申候。向を一篇左より右へ拭其如前を  
一篇拭て置付也。茶を汲時は口を向へ向け申候。



水滴之圖

蔓付茶入之事

此茶入拭よふ常の如く置付るは蔓を横に仕る也。茶杓  
貝先蓋へかけ本は置に付置が吉。又ツルの中を通乘て  
もよし併し是はツルを割て余り不好候得ども昔より  
ある事也。茶を汲ときはツルを豎に拵直し申候。



如是ツル立にも置付申候事あり。  
尤茶杓如此置

一、手瓶茶入之事  
 此茶入拭よふ水滴の如茶汲時は手を前へする也。置付  
 る時水滴にて了簡有べし。手は茶せんの方也。爐の時  
 左の方



手瓶之圖也

一、油滴之事  
 置付るは口釜の方へ向也。茶を汲時は口向へ廻す也。



油滴之圖也

右水滴油滴手瓶其外此類袋は合様により横に入る

也。立にも入る也。立に入たる時は初置付るは其儘也。其  
 時は後袋より出しては又定の如く置付る也。

裸茶入之事

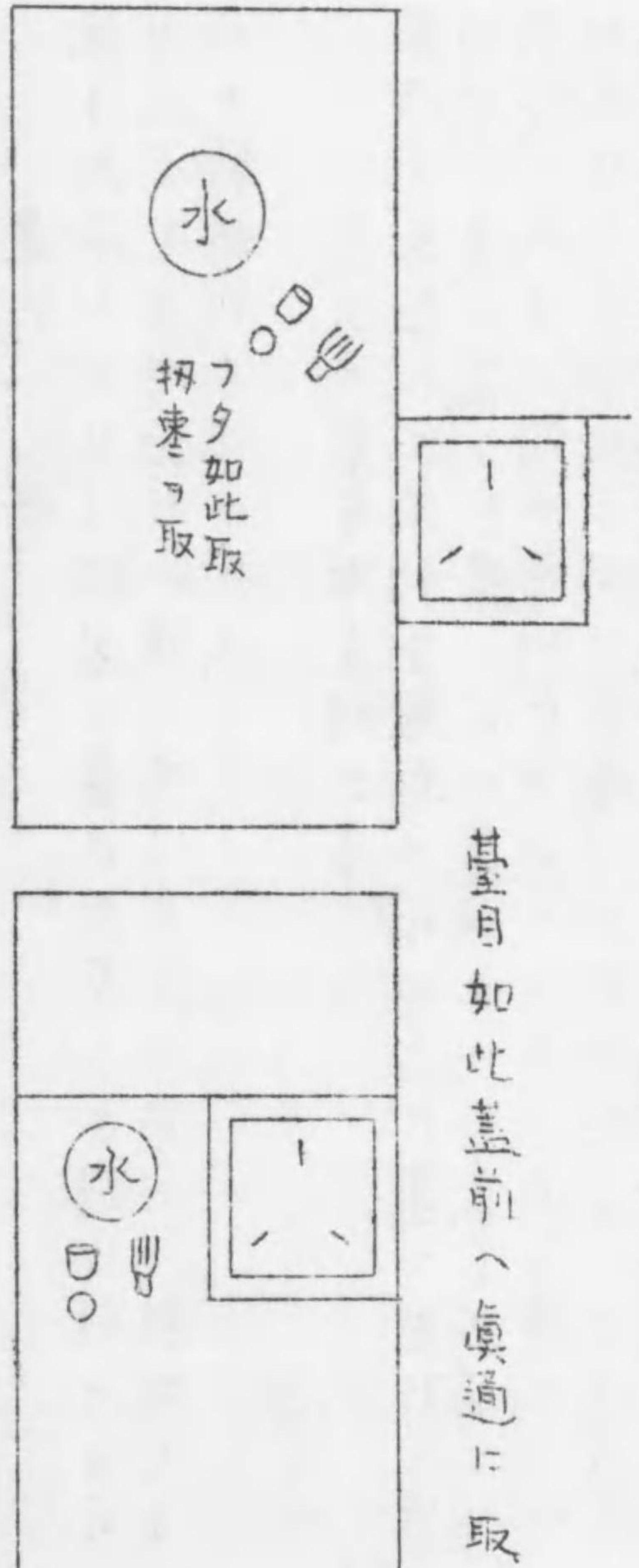
一、是は大茶入が又は酷暑の事也。大茶入を裸に付たるに  
 は人に毛角力取杯の裸に成りたるは氣みの能物なり。  
 時の物好によつて用之。

左にて蓋を取棄扱之事

一、茶汲とき右にて茶物を取右の膝の上に置て左にて置  
 付儘に棗の蓋を取棗の前に置扱手にこ棗を取茶を汲  
 茶碗へ入、本所へ置付前の如くふたをメる事有是は  
 利休折々居間にて點の水候時如此被致しと也。急度し  
 たる時は不用候よし。夜吐の所など薄茶の内一度杯は

面白よし被申候利体被用し事なり此は不苦用之。

蓋目如此蓋前へ真通に取



其内に蓋目か向切に此點様能候。四置半にてけ蓋置たる所悪く見るなり。

長緒之扱之事

一、茶入を常の如く前へ取、左りを茶入へかけ右にて緒を引解きたる緒のたるみ不申まで引廻し、持たる緒の端を小指と紅指ゆびにて持、其儘兩手にて茶を廻し、常の如袋を延し右にて持たる緒を茶入の上へ置、其儘右にて茶入を拵、左へ乗せ右にて緒の端を茶入の下へ拵、そへ尤左の事、紅指ゆび、右にて茶入を出し下へ置也。扱袋の口を直に付て左にて拵、右にて緒を左の人さしへ二半に輪にして袋の中へ緒を入常の如置付る也。長釘へ懸る事なし。

大津袋之事

一、袋を取時は常の如、前にてほごきたる左の手へ乗、葉を出てと吉、先は左へ拵、右にてほごきたるがよし。扱は二つに

折て常のごとく置付る也。勿論向より前へ折也。



ヶ様の物也。

一、茶入蓋へイジツク  
蓋を取申所常の如く取手の中にて返蓋を仰向置事有  
是けへイジツクに限たる事也。仙叟の被致候事也。用也。  
又常の如く取は常也。

一、和中包茶入之事  
常の如茶入を前へ取置兩手にて解き兩方へ分置前に  
成りたる角を向へひろげ向へ懸りたる角を左に持前  
へ引張右にて茶入を拵て上斗左にて販さを置取其心

く紗を直に置み使ふ也。又直に左の手へのせ右にこほ  
どき茶入を右にて拵下へ置も吉。此所付茶入を右にて  
取たらば左の泉直に返し申候。手の上は一ぱいにひろ  
げ有け思ひ

茶杓置様の事

一、爐にては茶杓茶入のツクの右へ置風爐にてはツクの  
左へ置也。併勝手違たる時は又心得あるべし。かひ先斗  
を茶入掛候吉。茶入により取合悪敷あり見合也。載て悪  
敷は貝先斗を掛也。此所茶杓拵たる上を左にて拵右に  
て又中程を拵茶入へ掛る也。取る時も右にて其儘取也  
ふしたしの事傳授に託す。  
一、茶杓置時は茶入、棗は向より置其外中次一文字類は眞  
直に置たり。

一、茶杓拭様  
 常舛は貝先斗拭也。又本の方を拭事もあり。先是は重あ  
 しのりい也。此所は又帛を置斗直して本を拭が吉常の濃  
 茶の時も間には改たる時はする也。

五徳蓋置之事

一、蓋子長板の時水翻より出し爪を上にして置也。扱釜  
 の蓋を取候時輪の方を上へ返申候。初終爪壺本前也。  
 返様は右にて蓋置を取左の手の上へ乗せて返右にて  
 置付る也。勿論仕廻にも柄杓を仕廻て直に前の如く爪  
 を上へ返し申候。柄杓掛時は一本の爪柄杓の柄の通り  
 也。尤翻へ入る時は爪の方なり。  
 一、爐の時棚類にても使ふ時は爐の角常の所へ置付るに  
 も蓋子のとり取り取扱なり。

一、勝手より翻へ入て出る事は大方はせめ事に候得ども  
 若し又々様の時は如常柄杓を左に拵て右にて蓋置を  
 取出し手の内にて輪を上へ返し置付る也。

茶道具運事

一、道具は水指より茶碗茶入拵出置付歸時は皆客の方へ  
 廻り歸る也。仕廻て取入時も同。水翻斗は勝手へ廻り取  
 入る也。是不淨成物故也。  
 一、水指兩手にて拵出かか事なし其座へ置付左の手より放  
 し引又右の手引取入時先右より手を懸左を後より  
 かけ申候。  
 一、茶碗茶入拵出は茶碗をひきく茶入を少し上て拵出る  
 也。置付る時も先茶入より置付扱茶碗を置付尤取入時  
 も茶入より取上後にて茶碗を取也。



水指如此もち出す

一、今日庵にて茶點之事  
水使を堂庫同様は飾也。茶點時翻大方は持出申候へども又水こぼし無に直に水使ひへ湯を捨事もあり。

一、道安座敷にて茶點事  
此座敷にて茶點時は中柱右の方の火燈口を明て敷居の上へ蓋置を使い柄杓をかくるなり。

一、茶點時膝敷事  
茶點時右の膝を敷事有之候。

一、茶碗拭様之事  
茶碗拭事定の通縁をくるくる三四篇程拭茶巾を中へ入取直し中を拭事圓の如拭也。右を拭左を拭中を二篇拭也。重き手前のときは極て如此也。常は又略す故二つ極にて漕也。



茶碗之中如斯拭也

一、茶碗和中付出事  
常躰は常躰を拭とき如ふくさを折て出也。尤茶碗より下の方なり返時と同和中。

一、懐中より出し服紗四にして出づは巻敷紙と同前也。



四ツに折出す服紗ニ圖



茶碗ニ圖也。

茶入と茶釜間之事

一、茶ゆん茶釜置台時間は置目四つに極たるもの也其内を五つ或は三に置ても不苦候。

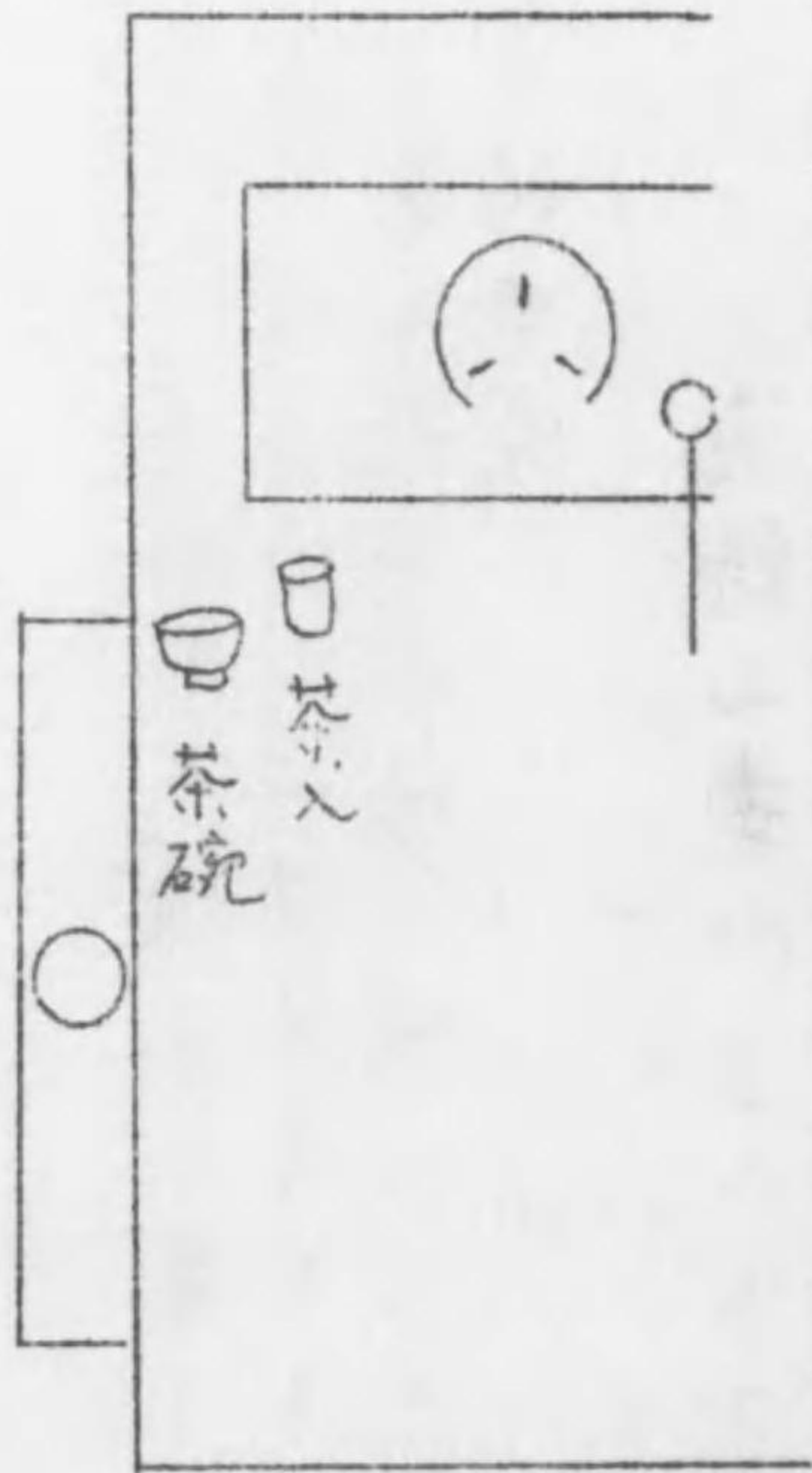
茶碗持様

一、風爐の棚の前にて仕廻とさけ右にて持て左の手少し

一、そへ右斗にて歳と置合する方宜候よし宗匠被申候尤左にこそ置合事不苦候得ども先右の方能候よし。茶點懸時水指の前より直に左の手にて茶碗取来るは悪敷候よし。

道幸之事

一、道幸より直に茶點るといふ事あり是は極老のことなり常に用候事にてなく候。



是け長板一つ置也。常の風爐にこそ道幸ハ中水指

一、茶碗茶入拵出す事  
 羹の方を上て拵運申候。尤左の手前の時も常の如く是も羹と茶入同様に拵たるが左手前にては能當りたると被申候。

一、流飾之事  
 是は向切逆手前の事なり。四置半にても致し候併先向切の逆の事也。流と云は向逆の事也。四置半の流點とは不聞。

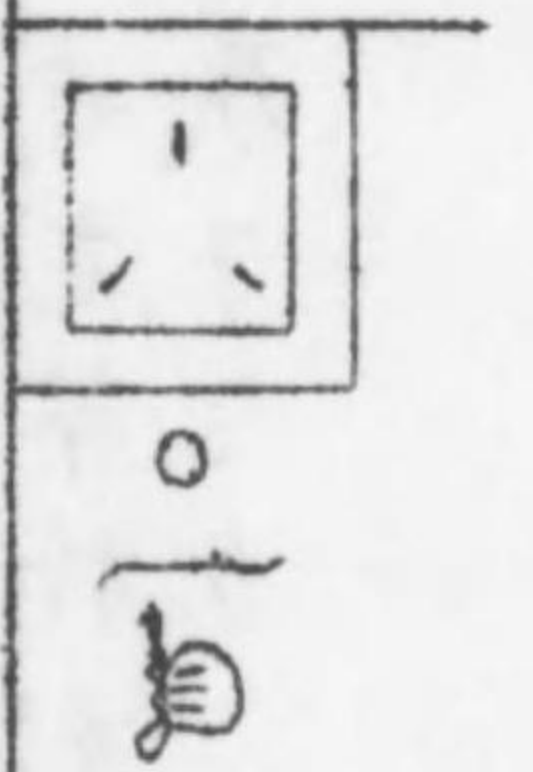
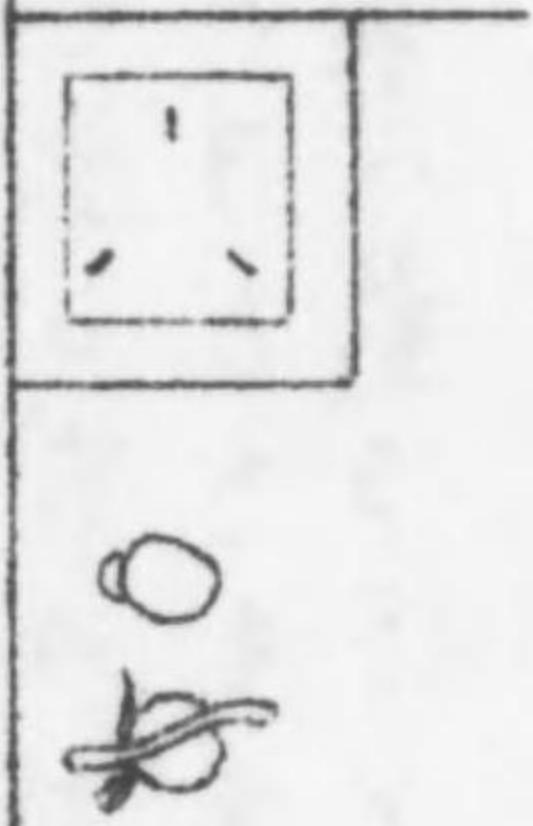
一、妙喜庵  
 爐の時も風爐の手前同前  
 茶の湯の時ニ枚襖をはづすは夏氣の所分又は折符の事也。

一、四置半  
 四置半にて初茶碗は前へ取漬は前へ取不申直に拭て置付事あり。愚敷事にはなく候。振出しの時又能と被申候。

一、茶入茶杓袋出す事  
 茶入茶杓袋常の如く出し袋は口を客の方へ向出す事有。此所は相客へ廻す時又亭主へ返時口又向にす也。又袋の上へ茶杓をのせ出す事有。尤茶杓此所は茶入と袋とを出し袋の上へ茶杓を載る也。尤茶杓相客のほう也。もどすとさきも又そのとふりに戻すなり。  
 ○茶杓袋へ載ることなし。



茶入茶杓袋裏へ出す所尤のせたり。



岸舂出ず。

一、茶入の緒解時兩手にて解くは重き手前々事也。常舂は片手にて解也。併今は兩手の方多しするなり。

茶入之緒解事。

此書は天然宗左之口授

寛政十戊午臘月下旬

劉篤徳堂寫

摘 芳

不羨齋孤峰川上宗雪白と云不は少うして茶事に志し花洛  
 へ登り如心齋天然宗左を師として親する事十餘年天  
 然亦宗雪が茶事に秀才たるを奇として盡く茶術の秘  
 訣を授く宗雪東都へ来り茶事を心業とす天然宗雪を  
 賞譽せし事京都に云傳ふといへども東都に知る者稀  
 かりよつて其一二を記して永將來に傳ふといふ事し

天明八年臘月朔旦

宗雪真甚子傳授の時書院床に大龍和尚の筆喝石巖といふ一行物を掛置如心齋宗雪へ申けるは今日真甚子傳へ候と云ふて右意軸をばづし裏をかへして懸たり宗雪拜伏して一軸をばづし初のごとく表にて掛直したり如心齋真甚子右の通なり業は重て傳へしと申たりとぞ真甚子傳授せし門人多しといへども皆點前のみを習ひたる斗にてかこの如く傳へられたるは宗雪壹人なりと堀内宗幽物語

如心齋又玄齋直齋三人にて花月を致たる事あり宗雪も右の内へ加りはじめ宗雪花にあたり宗雪月に當り如心二度月花に當り候宗雪はじめ月にあたり候と札を返し直にのき通ひの心にて末座に居り候設は三宗匠の華月といふ殊三家前々より兎角不和に候處宗雪年若にて如心へ問答いたし申直りのころの花月ゆへ宗雪は別

の者には候間前文の如く退き候よし塗師宗哲側に侍りて宗雪出来ましたと申ければそのくらしいの事なりぬ宗雪にはなきと如心齋譽たりと宗幽物語

明井常樂庵といふに三年籠り如心は狗子却有佛性也否州云無このことにて悟り宗雪は庭前栢樹子といふことにて悟り候夫ゆへ兩人とも茶事も格別なりと宗幽物語

宗雪京師にありし時茶湯もたらぬ程の旅宿にて如心風爐名残の茶好候其時の茶旅宿といふ名残といふ面白とて如心花入の横へ大出末と書たり右會記は本に記す花入の文字は利齋に彫せ所拵す宗雪琳光院寄進百會其外茶の湯にも出る天明三年如心齋三畑追善の湯の時八月十一日予参りたるに大出末の花入出る花はふじばがまを生きたり

利休は香吉に仕へたるゆへ寛名のなき事はあるまじ  
 と宗雪如心、尋ねれば聞傳へずと申候其後宗雪考候は  
 利休の判旁如此は方は方と云字ならん少是は明の字な  
 るべしとあらば利休實名は研明ならんと如心へ申候へ  
 げ如心もさあるべきとて書留置たると宗雪物語  
 一二三を打に割の宜き事あり一二三の書にも此事記  
 さず只札の打よふに鏡とすものあり上遣の自然と  
 知るべしと斗りありて知る人なき宗雪是を工夫して如  
 心へ申たるに尤の當せり依て宗旦好赤樂手附水指銘冬  
 魚と如心付たるを褒美に送る宗幽物語  
 高麗卓はもと床飾りの卓也如心一閑張にして茶事に  
 侍ひ四方棚の扱に於後藤玄乘此卓を如心へ頼卓出まの  
 頃如心宗雪兼て玄乘方へ廻り炭に参べきと約せし日な  
 るに其卓を先へ遣し扱如心宗雪へいへるは其方玄乘な

のばけふ此卓如何扱候やと問宗雪答三薄茶器を飾り下  
 柴籠を置べしと如心云尤扱始薄茶好まぬ候はば如  
 何致候と問宗雪答て流し點に致べしと云如心賞美せし  
 と宗幽物語  
 水野大炊頭大病に付宗雪江府へ下り候如心離別の茶  
 振舞候後炭薄茶瀧て宗雪如心へ申候は久しく御炭見申  
 まじく候炭見たまよし好候如心炭までして久しく炭見  
 申まじく候宗雪炭見申度と如心返り候扱相瀧て如心送  
 りのかかりに鉦を打候時節といふ是開情にして宗雪お  
 もはば二足三足下りたりと云送り鉦といふ事なき事な  
 り兩人とも格別成る器量ゆへと宗幽物語  
 不審庵にて宗雪亭主にて如心庵にたり候て茶湯あり  
 宗雪如心へ花を所望す尤船の花入にて花は白萩むくげ  
 たり如心萩を入て宗雪へ好宗雪むくげを生添て又如心

へ好如心けしめりごとく蘇を生る。園を忌候舒如心莖を  
 上げて廟へ載て出る。宗雪花を花入へ入て廟を拵送り  
 出て如心へ返す。其働格別成る事と宗幽物語  
 如心方へ出入候道具屋善治といふもの如心へ茶事を  
 警古したき由を申先茶事より茶にても掬候へと如心身  
 石と石を付遣候時如心身石へ申けり。眞手桶へ花何を  
 生可申候やと存候品出付未べしと申付たり。申石村若を  
 生べきと書付まり候如心宗雪へ尋けるは何か然やと宗  
 雪蓮の巻葉可生といふ如心は木賊を可生と云。扱右の品  
 を書付如心宗雪いっ此が申石なりんと存候やと詳け此  
 ば宗雪本賊は名人の場なり蓮の巻葉は上手の場也。申石  
 はかさつげたなるべしと云。さあらば其方は何を入可申  
 と拵候存候やと問け此ば不審庵の庭にあり。壽蔓木を  
 可生と答。如心宗雪が皆申をさすり感悦せしこと宗幽物語

壽蔓木とは蔦の事也。大木の蔦にマ中々生る品にはある  
 ず。最早生る品なきといつていぬるきゆへ壽蔓木を生可  
 申と答たり。宗雪の氣性の高き事かくの如し。  
 家本にては五歳の時花入初七歳の時茶點初也。宗真(吟  
 啄齋の事)五歳の時如心宗雪はじめ門人申けり。は近日宗  
 真花入初の時何の花入を用べきと存候品書付可出と申。  
 門人青竹花入などと書付者多し。宗雪獨雲龍釜と書付未  
 り如心も兼て雲龍釜の心組ゆへ賞美して機々相副とハ  
 ふ一行物を賞美に書て遣けり。と宗幽物語右一行物は上  
 下朝黄地丸龍金入中紺地金小袷装せしなり。  
 宗雪は原叟に手前似たるとて如心覽々齋の書物を遣  
 し候上し。宗幽物語宗雪へ承候處右の通の旨書物は原叟  
 の人の承合候事を答候。扣にて原叟の手跡には無候よし  
 申候。且し原叟へは對面も不致候よし。宗雪申候。

折宗雪江戸にて冬木方へ参且座有え東致候筋柵の枝  
 宗雪江都にて如心同道して外へ茶に参たる時門人  
 小西彦左衛門といふ所人の方へ立寄けるに彦左衛門風  
 爐の灰を仕懸て茶たばこ杯のせ話やき候うち右灰を如  
 心に残まき候て灰を致し置たると申候扱其夕べ歸りか  
 けに如心申候は彦左衛門あつ灰に俄に茶を致候はば  
 面白がるべしといふ宗雪云左候けげ長板一つ置が能と  
 申候如心感心せしと宗幽物語  
 宗雪紀州へ下り候節横井治太夫といふ者方に備前總  
 利の口より下まで打かきたる花入ありたづねけは原  
 變へ備前徳利を花入に致し度と申候へば原變直にかく  
 如く打かき遣し候と申宗雪原變か氣性の面白きに左

花入を賞歸り如心へ見せければ如心も原變の氣性を宗  
 雪が見出したる所を面白とて如心又其花入を宗雪より  
 賞て不審庵にて口切枇杷一枝入て遣ひたりとぞ面白事  
 と宗幽物語

右花入は如心の遺物に多田宗掬へ遣候後に宗掬懸花  
 入に致し上もなき下手扱と宗雪笑ふ  
 紀州の茶道雪常甫方へ如心と樂吉左衛門茶湯に呼候  
 兼て約束の日常甫俄に其日紀州へ下る事出来茶湯も急  
 ぎ致候故宗雪勝手を頼まれたり其よし如心聞て今日の  
 茶は宗雪がするのにてあるべしと申たり圍へ入候處懸  
 物花一處に筋有えゆへ扱こそ宗雪が致すと如心申たり  
 會席も何も角も手廻し能濟て其後宗雪如心へ右茶事如  
 何也と尋候へば宜べとも右の通急き候けげ先鱧と食斗  
 りにて膳を出し跡より追々出し候けげ猶おもしうかる

べしと如心申たりと宗幽物語  
 春格別暖氣のころにて不審庵風爐を出したりき扱如  
 心宗雪へ申けるは明日花見の茶致すべく候右茶事如何  
 成る茶事か當て可申候今晩大徳寺へ参り明日可参と申  
 宗雪定て爐の茶に來ると思ひ足袋をはき爐の心得にて  
 行くかんの如く爐にして茶あり宗雪今日の茶の事書付  
 來りたるよし申候へば如心見るまでにも及ばず足袋を  
 はき候故知れ候と申候茶齋書院にて唐物丸盆へ櫛の折  
 枝を置肴を組酒を出したると宗幽物語此時宗雪大きに  
 響るれ候よし塗師豊田八郎兵衛年若の時如心方へ参り  
 候處如心人へ吐候け宗雪は油きつたる坊主ちれど道具  
 置へちをると人がちがふ見所のある者也ちまり見當ら  
 め茶人なりと如心申候よし八郎兵衛物語  
 如心淨玄同道にて宗雪方へ茶に参候時炭をいたし掃

込候へばあれが名人といふにてあるべしと如心申たり  
 と淨玄物語

寛延元戊辰年京師旅亭宗雪風爐名残茶湯如左  
 九月廿一日晝  
 如心齋 一客  
 後樂長入來る

一、掛物

大龍和尚墨跡  
 一圓相に 本来清淨  
 無心無事

一、釜

田口 琉球風爐

一、香合

梨子 如心二重

一、花入

此花入へ如心大出奉と被認候  
 瀬戸

一、茶碗 宗入如心銘 ゴロタ  
 一、茶入 如心書付 町棠  
 一、茶杓 覺々書付 むかし桑

花菊 袋 黒舟

柿葉 氷豆腐 にしめ

膳に揚枝 食椀 雑水 松もち たたき菜

猪口 香の物 壹ぺん

縁高銘 物菓子 きんとん せんべい

初座 桑小卓上 葵瀨戸香爐 薰炷 下に水指  
 後座 棚引運びに成る  
 座敷 床白澤の繪前に 桑小卓上に 香爐残し下に 青貝  
 重香合 伽羅白檀薰  
 後炭上一重用ゆ  
 右茶湯を大出末の茶湯といふ。

常甫茶の時 付薄茶にて仕廻に曲もの水指引に出た  
 る時 如心齋水指を其儘置候へと名残りとして其水指置  
 ながわ上の花を取り右水指へ花を生かへ申され候花か  
 きつばた一しは面白し勿論水指は風爐の脇その儘なり  
 宗雪隠宅の茶跡にて茶の湯見廻とて吉左衛門鯛を  
 枚送り申候處 菜刀一枚の事 中へ仕方御座ちくへつ  
 の前にて此鯛を丸焼にして醬油をかけ是斗にて夜食進



申候。長入直に相伴如心齋丸焼甚かんし被申候

此冊子は勤の飾カある折々秃筆を躓れば蚯蚓の輓  
輪がごとく言葉賤しく誤字も多かめれども改べき  
才もなければ其儘に置ぬ後の君子よろしく補あら  
ん事を希ふ。

右之書者杉浦雲州之撰也。

戊午 春日

篤 徳 義 △ ? 寫

大正七年

昭和十一年一月十五日印刷  
昭和十一年一月二十日発行 非賣品

校正兼発行者 豊 吉 宗 壽

東京市麻布区本村町五一

發行所 東京市麻布区本村町五一

天 眞 寺

終